

DIE LUFTFAHRT ALEXANDER DES GROSSEN
—EIN WERKKATALOG DER BILDZEUGNISSE

Koichi KOSHI

I

Pseudo-Kallisthenes (II, 41):

① 'Ο Αλ. ὑπέλαβε διὰ τῶν σημείων τούτων ἐκεῖσε εἶναι τὰ ἄκρα τῆς γῆς. ④ ('Ως δὲ ἔφθασαν εἰς τὴν ἀψίδα ἣν ἔκτισεν Ἀλέξανδρος) ἔγραψε (πάλιν ἐν αὐτῇ) οὕτω διὰ γλυφίδος· ⑧ Οἱ βουλόμενοι εἰσελθεῖν ἐν τῇ τῶν μακάρων χώρᾳ, δεξιᾷ πορευέσθωσαν. [] ⑩ Προσέταξεν οὖν συλληφθῆναι ἐκ τῶν ὀρνέων τοῦ τόπου ἐκίνου δύο. Καὶ ἦσαν πάνυ μέγιστα [] καὶ ἀλκιμώτατα καὶ ἡμερα· ⑫ βλέποντα γὰρ τοὺς ἀνθρώπους οὐχ ἔφευγον. Τινὲς δὲ τῶν στρατιωτῶν καὶ ἐπέβαινον ἐν τοῖς ἄμοις αὐτῶν· ⑬ τὰ δὲ βαστάζοντα [] ἀνέπταντο. ⑭ Ἡσθιον δὲ καὶ θήρας ἀγρίους, ἔνθεν τι καὶ πλεῖστα τῶν [] ὀρνέων ἦλθον πρὸς αὐτοὺς διὰ τοὺς ἵππους θνήσκοντας. ⑮ Δύο δὲ ἐξ αὐτῶν κρατήσας ὁ Αλ. προσέταξε μὴ [] φαγεῖν βρώματα μέχρι τριῶν ἡμερῶν. ⑯ Τῇ δὲ τρίτῃ ἡμέρᾳ προσέταξε κατασκευασθῆναι ξύλον ὁμοίον ζυγῷ καὶ τοῦτο προσδεθῆναι ἐν τοῖς τραχήλοις αὐτῶν. ⑰ Εἶτα [] ἐλθὼν αὐτὸς ἐν μέσῳ (τοῦ ζυγοῦ), ἐκράτησε τὸ δόρυ ὡσεὶ πῆχυν [] τὸ

μῆκος [] ἔχον ἐπάνω ἤπαρ []. ⑱ Εὐθὺς οὖν ἀναπτάντα τὰ ὄρνεα [] τοῦ φαγεῖν τὸ ἤπαρ [], ἀνῆλθε μετ' αὐτῶν ὁ Αλ. ἐν τῷ ἄερι εἰς τὸ ὕψος. [] ⑲ Πάνυ δὲ ἔτρεμε διὰ τὴν [] τοῦ ἄερος ψυχρότητα [] τὴν ἐκ τῶν [] ὀρνέων ἐκείνων γεγεννημένην.

① Εἶτα εὐθὺς συναντᾷ αὐτὸν πετεινὸν ἀνθρωπόμορφον καὶ λέγει αὐτῷ. [] Ἀλέξανδρε, [] τὰ ἐπίγεια μὴ γινώσκων, πῶς τὰ οὐράνια καταλαβεῖν ἐπιζητεῖς; ὑπόστρεφον οὖν διὰ τάχους ἐπὶ τὴν γῆν, μήπως τοῖς ὀρνέοις τούτοις κατάβρωμα γενήσῃ. ② Καὶ πάλιν φησὶ []· πρόσσχες [] ἐπὶ τὴν γῆν κάτω. 'Ο δὲ Ἀλ. μετὰ φόβου προσεῖχε, καὶ ἰδοὺ εἶδεν ὅτι ὄφεις μέγας κύκλω, μέσον δὲ τοῦ ὄψεως ἄλων []. ③ Καὶ λέγει αὐτῷ ὁ συναντήσας· γινώσκεις τί ἐστὶ ταῦτα; ἢ ἄλων ἐστὶν ὁ κόσμος· ὁ δὲ ὄφεις ἢ θάλασσα [] ἢ κυκλοῦσα [] τὴν γῆν. ④ Αὐτὸς δὲ ὑποστρέφας τῇ βουλῇ τῆς ἄνω προνοίας χατῆλθεν ἐπὶ τὴν γῆν μακρόθεν τοῦ στρατοπέδου (αὐτοῦ) ὁδὸν ἡμερῶν ἑπτὰ. [] ⑤ Εἶχε δὲ ἐκεῖ σατράπην [] αὐτοῦ καὶ λαβὼν παρ' αὐτοῦ τριακοσίους ἵππεῖς. ἐπορεύθη σὺν αὐτοῖς καὶ

ἦλθεν εἰς τὸν στρατὸν (αὐτοῦ). Οὐδέτι
οὖν προσέθετο ἀδυνατοῖς ἐπιχειρεῖν.

(Paris, Bibl. Nat., Cod. suppl. gr. 113)

「①アレクサンドロスはいくらの^{しるし}徴によ
って、そこに大地の果てがあると悟った。
④(文意不明)彼は(再びそのアーチ門
に)次のように鑿^{のみ}を用いて彫り込んだ。
⑧福者達の国に入ろうと欲する人々は右
手を歩め。[]⑩さて彼はその場所で、
鳥どもの中から二羽を捕えるように命じ
た。それらは実に大きな鳥で、[]
すばらしく丈夫で、しかもおとなしかつ
た。⑮だから人間達を見ても逃げなかつ
た。そこで兵士達の幾人かは、鳥ども
の肩に跨った。⑳すると鳥どもは[]
乗せて飛翔した。㉓鳥どもは野獣を餌食
にしていた。そこで[]鳥どもはたく
さん、死んだ馬を求めて人間達の方にや
ってきた。㉖彼等の中の二羽をアレクサ
ンドロスは捕えて、三日の間[]餌を
食べさせぬように命じた。㉘さて三日目
に木材を輓^そっくりに組み立てて、これ
を鳥どもの頸に結びつけた。㉚それから
[]。[]彼は(輓の)真ん中に乗
り込み、長さ[]ペーキュスの槍を持
っていたが、その上の方には[]肝臓
がついていた。㉜さて鳥どもが[]肝
臓を食べようとして、飛び上がるとすぐ
に、彼等と一緒にアレクサンドロスも大
空高く上がっていった。[]㉞彼は
[]空気と[]鳥ども[]から生
ずる寒気のために激しく身を震わせた。

「①すると突然、人間の姿をした一羽の
鳥が現われ、彼に言う。<[]アレク
サンドロスよ、[]地上のことも知ら
ないで、どうして天上のことを探究しよ
うと望むのか。さあ早く地上に引き返し、
これらの鳥どもの餌食にならぬようにし
なさい。> ⑦そしてまた[]言う。<[
]大地を見下ろしなさい。> そこでアレ
クサンドロスは恐れを抱きながら見下ろ
した。すると見よ、彼は大蛇が環を作っ
ていて、その蛇の環の中に[]円板が
あるのを認めた。⑩するとその出会った
者が彼に言う。<汝はあれが何か分かる
か。あの円板が世界である。あの蛇は海
で[]、世界を取り巻き、大地[]
を巡っているのだ。> ⑮そこで彼は天上
の摂理からの勧告に従って引き返し、
(彼の)陣営から七日間の道程離れた地点
に降りた。[]⑰さて彼はその土地に
自分が任命した^{サトラペース}総督を置いていた。そ
して彼のもとから三百の騎兵を得て、彼
等と共に進んで、(彼の)軍隊に到着した。
彼はもはや二度と不可能な事柄を企てよ
うとは思わなかった。」

(偽カリステネス『アレクサンドロス物語』
第II章41節より)¹⁾

* 略号で引用した文献については、本稿カタログ篇(独
文)の冒頭に掲げた文献リストを参照。なお、本稿は
「西洋中世美術における世俗的テーマの研究」の一部を
なすものである。

(1) 本稿 25 および 30 頁参照。

II

西洋中世世界において最も人気があった古代文学・古代史上の人物は、疑い無く、ギリシア世界帝国の建設者アレクサンドロス大王(356—323 B.C.)である。アキレウスやオデュッセウス、カエサルやアウグストゥスも、中世文学・美術において演じたアレクサンドロス大王の役割とは比較できない。実に、アイスランドからインドネシアのスダ列島に至るまで、35ヵ国語による80以上の文学作品が、この偉大なマケドニア王の生涯とその英雄的行為を称えているのである²⁾。

中世におけるアレクサンドロス大王の人気には、幾つかの理由が考えられよう。彼は、彗星の如く現われて数々の軍事上の成功を取めながら若死した歴史上の人物であるが、特にペルシアやインドの戦役における様々の珍しい冒険譚は、死後間もなく伝説化され、3世紀に至って『アレクサンドロス物語』と

して集大成された。中世のアレクサンドロス文学³⁾が拠所としたのはまさに、大王に関する古代の歴史的な著作(例えば、プルタルコスの『英雄伝』*Vitae Parallelae* やアリアノスの『アレクサンドロス遠征記』*Ἀνάβασις Ἀλεξάνδρου*)ではなく、この空想的な『アレクサンドロス物語』であった。西洋中世美術におけるアレクサンドロス大王も、歴史上の人物というより、むしろ一定の概念の担い手として、あるいは、中世人の空想の対象として登場している。この点で中世美術の作例は、アレクサンドロス大王とダリウス3世との戦いを表わしたモザイク(ナポリ国立美術館)や《アレクサンドロスの石棺(イスタンブール考古学博物館)をはじめとする、歴史人物としての大王を扱った古代美術の作例⁴⁾とは大きく異なるのである。

西欧中世における古代のアレクサンドロス文学の受容は、東方に対する関心が高まった十字軍時代に特に著しいが、もともとキリス

(2) H. Buntz, *Die deutsche Alexanderdichtung des Mittelalters*, Stuttgart 1973, S. 1.

(3) P. Meyer, *Alexandre le Grand dans la littérature française du moyen âge*, Paris 1886.

(4) これについては PEISTER S. 330 ff. を参照。

(5) 「キッテムの地よりいで来たれる、ビリボの子、マケドニヤびとアレキサンドロスは、ペルシャびとおよびメデアびとの王ダリウスを討ちし後、彼に代わりて王となれり。(彼はさきにギリシャの王となりし者なり)。彼は多くの戦いをなし、とりでを奪い、地の王たちを殺し、地の果てにまで至りて、多くの国々の民を略奪せり。かくて地、彼の前に穏やかとなるや、彼

は高められて、その心おごれり。彼は、はなはだしく強き軍隊を集めて、諸国、諸民、諸王を治め、彼らはみな彼にみつぎを納めたり。

この後、かれ病にかかりしが、自ら死の近づけるを悟りぬ。ここにおいて、彼はその若きときよりおのれと共に育てられし、いと尊ばれおる臣下を召し、彼のお生きおる間にその国を彼らに分ちたり。かくて、アレキサンドロスは十二年の間世を治めて死ねり。

その臣下ら、おのおの、おのが領地にて民を治めたり。彼の死後、彼らはみな王冠をいただきしが、彼らの子らも多くの年の間、そのごとく地上に多くの悪をなしぬ。」(『アポクリファー旧約聖書外典一』、

ト教中世にとっては、アレクサンドロス大王は聖書に言及されていて、従って肯定的であれ、否定的意味合いにおいてであれ、キリスト教救済史上、一定の位置を占めているということも、大王の永続的な人気の原因として見逃せない。彼は、旧約聖書マカベア第一書(I, 1-8 節)⁵⁾に述べられているのみならず、四つの世界帝国についてのダニエルの夢をはじめとする幾つかの話(ダニエル書 VII, 17; VIII, 5-21; XI, 3 以下)もアレクサンドロス大王に関係づけられるのである⁶⁾。

III

ところで、アレクサンドロス大王の伝説的な物語は、一体どのようにして西欧中世の人々に伝えられたのであろうか。

大王の生存中すでに口伝による伝説物語の伝統が始まり、そこからやがて最初の小規模な著作が幾つか生まれたものと思われるが、中世のアレクサンドロス文学にきわめて大き

な影響を及ぼした『アレクサンドロス物語』は、比較的遅く、大王の死後 600 年以上たった 3 世紀にアレクサンドリアのギリシア人によって著わされた。この作品の著者は 15 世紀以来、伝統的に、大王の遠征に従軍した歴史家カリステネス(370—327 B.C.)とされているが、それが全くの誤りであることは周知の通りである。この偽名のカリステネス Pseudo-Kallisthenes⁷⁾の『アレクサンドロス物語』には、少なくとも五つの、先行する文献が利用されていることが近年の研究により明らかにされている⁸⁾。

今日、偽カリステネスのギリシア語原本自体は伝えられていないが、幾つかのリセンション(α , β , γ , δ など)に分類できる多数の後代の写本が現存している⁹⁾。しかしながら、西欧中世のアレクサンドロス文学の源泉となったのは、それらの偽カリステネスのギリシア語本ではなく、その二種類のラテン語訳、すなわち、ユリウス・ヴァレリウス Julius

日本聖公会出版部, 1968 年による)

- (6) これについては聖ヒエロニムスの注釈を参照。Hieronym., *Comm. in Danielelem* (Migne, P. L., XXV, Sp. 529 ff.).
- (7) 偽カリステネスについては, K. Ziegler und W. Sontheimer, *Der kleine Pauly*, Stuttgart 1969, III, S. 86 f. を参照。
- (8) R. Merkelbach, *Die Quellen des griechischen Alexanderromans*, München 1954; H. Buntz, op. cit., S. 3.
- (9) 古代末期にすでに挿絵入りの偽カリステネス写本が存在したという推定に関しては次の文献を参照。K. Weitzmann, *Illustration in Roll and Codex*, Princeton 1947, S. 145 f., 188, 196, u. Fig. 134;

Idem, *Classical Mythology in Byzantine Art*, Princeton 1953, S. 102 ff. u. Fig. 108-111; Idem, *Ancient Book Illumination*, Cambridge, Mass. 1959, S. 105 ff.; D.J.A. Ross, *Olympias and the Serpent: the Interpretation of a Baalbek Mosaic and the Date of the illustrated Pseudo-Cal-listhenes*, in: *Journal of the Warburg and Courtauld Institutes*, XXVI, 1963, S. 1 ff.

現存する挿絵入りギリシア語偽カリステネス写本は次の 2 点であるが、両方とも空中飛行の挿絵を含まない。Oxford, Bodleian Lib., Cod. Barocci 17 (13世紀); Venezia, San Giorgio dei Greci (14世紀)。

Valerius による『マケドニアのアレクサンドロスの業績』*Res gestae Alexandri Macedonis* (4世紀前半)¹⁰⁾、および、ナポリの首席司祭レオ Leo の『アレクサンドロス大王の出生と勝利』*Nativitas et victoria Alexandri Magni regis* (9世紀後半)¹¹⁾であった。

ただし、これら二つのラテン語訳も、その当初の形で西欧世界に伝播したわけではなかった。ヴァレリウスのラテン語訳が、9世紀に作られたその『抄録』*Epitome*¹²⁾によって西欧のアレクサンドロス文学(例えば、12世紀・フランスの『ロマン・ダレクサンドル』群 *Roman d'Alexandre*¹³⁾)に影響を及ぼしたと同様に、ナポリのレオのラテン語訳も、11世紀以降に作られた三種類の改定版 *Historia de Preliis I¹, I², I³*¹⁴⁾を通じて西欧世界に広まっていったのである(例えば、本稿カタログ篇に挙げられている13世紀の『古フラ

ンス語散文体アレクサンドロス物語』*Der altfranzösische Prosa-Alexanderroman*¹⁵⁾は、12世紀後半の *Historia de Preliis I²* から派生したものである)。

IV

このようにラテン語訳を介して西欧世界に伝えられた偽カリステネスの『アレクサンドロス物語』中、西洋中世美術史上最も重要な役割を演じたエピソードは、「アレクサンドロス大王の空中飛行」¹⁶⁾である。西欧では13世紀以降、ラテン語やフランス語・ドイツ語で書かれた、偽カリステネス系の挿絵入りアレクサンドロス物語写本が多数制作されたが(本稿作品カタログ52—68, 83, 84番参照)、空中飛行の場面はこれらにおいては言うに及ばず、ヤンセン・エニーケル *Jansen Enikel* の『世界年代記』*Weltchronik* (1277年以降、

(10) B. Kübler, *Iuli Valeri Alexandri Polemi Res Gestae Alexandri Macedonis translatae ex Aesopo Graeco*, Leipzig 1888.

(11) F. Pfister, *Der Alexanderroman des Archipresbyters Leo*, (Sammlung mittellateinischer Texte 6), Heidelberg 1913.

ナポリのレオは、その前置きに述べているように、10世紀中葉コンスタンチノーブルに赴き、同市でアレクサンドロス大王物語のギリシア語写本の写しを作製してイタリアに持ち帰った。彼は帰国後(968/69年頃)、そのラテン語訳を作った(オリジナルは現存せず)のであるが、そのもととなった写本は、ヴァレリウス訳に使われた、偽カリステネスの原本に最も近いリセッション α とは別のリセッション (δ) に属するものである。

(12) J. Zacher, *Iulii Valerii Epitome*, Halle 1867.

(13) *The Medieval French Roman d'Alexandre*, (Elliott Monographs), Princeton 1937 ff.

(14) A. Hilka, *Der altfranzösische Prosa-Alexanderroman nach der Berliner Bilderhandschrift nebst dem lateinischen Original der Historia de preliis (Rez. I²)*, Halle 1920.

(15) *Ibid.*

(16) この物語の起源(特にユダヤのタルムード文学、あるいはバビロニアのエタナ神話との関連)については、次の文献を参照。

Th. Nöldeke, *Beiträge zur Geschichte des Alexanderromans*, in: *Denkschriften der Kais. Akad. der Wissenschaften in Wien, Phil.-Hist. Klasse*,

作品カタログ69番以下参照)¹⁷⁾ や、ドイツ語の『歴史聖書』Historienbibel (作品カタログ77—80番参照)¹⁸⁾ を初めとする各種のテキストの写本におけるアレクサンドロス大王に関するセクションの挿絵としても描かれている。その上、空中飛行のテーマは、これと対をなす海中旅行のエピソード¹⁹⁾の場合と違って、写本においてのみならず、しばしば中世の教会堂を飾る浮彫や床モザイクなど、モニュメンタル美術にもその作例が見出される²⁰⁾。海中旅行の話には、単なる伝説あるいは作り話以上のものに解釈されるような要素が欠けているのに対し、空中飛行の話は様々に解釈される可能性を多分に含んでいたからである。

例えば、ビザンチン世界ではアレクサンドロス大王は常にビザンチン皇帝の手本(κάλος βασιλεύς)であり、空中飛行のエピソードは勝利のシンボルとみなされ²¹⁾、しばし

ば魔除けのシリーズ中の一場面として、教会堂の壁面その他に表わされた(作品カタログ11—13番参照)²²⁾。

西欧世界においても、このような肯定的な意味合いで表現された作例が見出されないわけではない。例えば、ゾエストの聖パトロクルス教会に所蔵されている12世紀の刺繍作品(かつて聖遺骨のクッションとして使われていたもの。作品カタログ87番参照)および、マトリーチェ(南イタリア)のサンタ・マリア・デラ・ストラダ教会南入口のリネット浮彫(12世紀、作品カタログ29番参照)では、空中飛行の場面はアグヌス・デイ Agnus Dei (神の子羊)と対をなして表わされている。つまり、アレクサンドロス大王の昇天場面によって、キリスト者はアグヌス・デイが象徴する天国に入れるという教義がここでは図解されているのである²³⁾。

XXXVIII, 1890, S. 26; M. Lidzbarski, Zu den Arabischen Alexandergeschichten, in: Zeitschrift für Assyriologie, VIII, 1893, S. 266; MILLET S. 111 ff.; SETTIS-FRUGONI S. 133 ff.

- (17) Jansen Enikels Weltchronik, hg. von Ph. Strauch, in: Monumenta Germaniae Historica, Deutsche Chroniken I, 1, Hannover 1892; Ross 1971 S. 80 ff.
- (18) J. F. L. Th. Merzdorf, Die deutschen Historienbibeln des Mittelalters, Tübingen 1870; Ross 1971 S. 107 ff.
- (19) A. Hilka, op. cit., S. xxxviii—xli; D.J.A. Ross, Alexander and the faithless lady: a submarine adventure, London, Birkbeck College, 1967.

- (20) 偽カリストネス系のアレクサンドロス物語において、空中飛行の直前に述べられている「海中旅行」を表わすモニュメンタルな作例としては、筆者の知る限り、ローマのパラッツォ・ドーリアにある15世紀・フランドルのタビスリー(作品カタログ88番参照)が挙げられるにすぎない。
- (21) H.J. Gleixner, Das Alexanderbild der Byzantiner, Diss. München 1961; H.J. Gleixner, Alexander der Große, in: Reallexikon zur byzantinischen Kunstgeschichte, Bd. I, Stuttgart 1963, Sp. 96 ff.
- (22) A. Grabar, L'Art profane en Russie pré-mongole et le «Dit d'Igor», in: L'art de la fin de l'antiquité et du Moyen Âge, I, Paris 1968, S. 301 ff.
- (23) SETTIS-FRUGONI S. 298 ff.

空中飛行のテーマはしかしながら、南イタリアのオトランド大聖堂およびトラニ大聖堂の床モザイク（共に12世紀、作品カタログ27・28番参照）の場合に見られるごとく、西欧中世では概して、あらゆる悪徳の元であるスベルビア *Superbia*（傲慢、思いあがり）のシンボルとみなされる傾向にあった²⁴。この見方が、アレクサンドロス大王に関する聖書の記述（マカベア第一書 I, 1-8）²⁵ に影響されたものであることは明らかである。すでに5世紀初頭、パウルス・オロシウス *Paulus Orosius* はその著『反異教古代史』*Historiarum Adversus Paganos Libri Septem* 第3章において、アレクサンドロスを反キリストの先駆者とみなしているが、彼同様、12世紀の神学者たちも否定的なアレクサンドロス観を表明している²⁶。例えば、修道院長ゴットフリー

ト・フォン・アドモント *Gottfried von Admont* は、アレクサンドロスをアダムとエヴァを誘惑した悪魔（へび）と比較し²⁷、フランスのスコラ哲学者ユゴー・ド・サン・ヴィクトール *Hugo de Saint Victor* (1096-1141)²⁸ が引用したイザヤ書の一節 (XXIV, 13-14)²⁹ を挙げて反キリストの先駆者たるアレクサンドロス大王のスベルビアを強調しているのである³⁰。しかも興味深いことに、南イタリアのトラニ大聖堂の床モザイク（12世紀、作品カタログ28番参照）やバーゼル大聖堂内陣周廊の柱頭浮彫（12世紀後半、作品カタログ33番参照）では事実、アレクサンドロスの空中飛行はアダムとエヴァの原罪の場面と対比されて表わされている。

このような一定の道徳的概念の担い手としてアレクサンドロス大王の空中飛行が表わさ

(24) これについては次の文献を参照。

GOLDSCHMIDT S. 72; LOOMIS S. 184; J. Sauer, *Symbolik der Kirchengebäudes und seine Ausstattung in der Auffassung des Mittelalters*, 2. Aufl., Freiburg i. Br. 1924, S. 439; MÅLE S. 270 f. なお、西欧中世におけるアレクサンドロス像の変遷については次の文献を参照。

E. Grammel, *Studien über den Wandel des Alexander-Bildes in der deutschen Dichtung des 12. und 13. Jahrhunderts*, Diss. Frankfurt a. M. 1931; HÜBNER S. 32 ff.; CARY S. 77 ff.

(25) 聖書のこの個所に関する中世の解釈については、

Fulgent. *De aetatibus mundi et hominis* X, xxxvii-xl (CARY S. 369 f.); Hrabanus Maurus, *Commentaria in libros Machabeorum*, I, 1 (Migne, P.L., CIX, Sp. 1127 ff.) を参照。

(26) これについては *SETTIS-FRUGONI* S. 241 ff. を参照。

(27) *Gotifredi Abbatis Admontensis Homiliae in Scripturam*, Hom. XV (Migne, P.L., CLXXIV, Sp. 1130 f.): *Per hoc nomen Alexandri, quod levans angustiam interpretatur, non incongrue draco ille, serpens antiquus, qui vocatur diabolus et Satanas, accipitur, qui, ex quo primum hominem in paradiso per inoboedientiam seduxit, tam inextricabiles angustias et labores initiavit ac levavit, ut omni posteritati Aadae numquam quotidianae angustiae et labores deessent aut desint, quamdiu homo vivit super terram.*

(28) *Hugo de Sancto Victore, Allegoriae in Vetus Testamentum*, XI (Migne, P.L., vol. CLXXV, Sp. 749 f.): *quis inquam per illum significatur nisi diabolus qui dixit: 'In coelo conscendam; super*

れたケースは多いが、しかし西欧中世の作例すべてが何らかの象徴的意味を持つとは限らない³¹⁾。このことはとりわけ、フランスのアレクサンドロス大王物語群の写本における、挿絵シリーズの一場面として描かれたミニアチュール（作品カタログ54番以下参照）についていえることである。フランスではアレクサンドロス大王は、宮廷文学の影響を受けて、騎士道精神に満ちた信心深い中世の王様 *le bon roi Alexandre*、寛大な君侯（いわゆる「鷹揚な施主」）としてとらえられ（これは例えば、ローマのパラッツォ・ドーリアにある15世紀・フランドルのタビスリー連作についてもあてはまる。作品カタログ88番参照³²⁾）、空中飛行の話も単なる空想的な冒険譚として表わされる傾向にあった。一方、ドイツではアレクサンドロス大王のイメージは概して否

定的であったと言える。ドイツのアレクサンドロス文学において重要な役割を演じた各種の世界年代記の著者がしばしば聖職者だったからである³³⁾。

V

すでに触れた如く、偽カリステネスのギリシア語原本は現存せず、後代の写本によって原本の『アレクサンドロス物語』の内容が知られるわけであるが、空中飛行の話は、現存するギリシア語写本のうち年代の早いものには欠けている。すなわち、原本に最も近いリセンション α を代表する 11 世紀の写本 A (Paris, Bibl. Nat. Cod. grec. 1771)³⁴⁾ にも、また、リセンション α から派生したりセンション β を代表する写本 B (Paris, Bibl. Nat.

astra Dei exaltabo solium meum, sedebō in monte testamenti in lateribus aquilonis, ascendam super altitudinem nubium, ero similis Altissimo? Hic quippe per suam superbiam, et calliditatem, et multitudinem angelorum secum superbientium, et progeniem humani generis in primo parente sibi subiecit.

- (29) 「あなたはさきに心のうちに言った、『わたしは天にのぼり、わたしの王座を高く神の星の上におき、北の果なる集会の山に座し、雲のいただきにのぼり、いと高き者ようになろう。』」（日本聖書協会『聖書』1963年による）
- (30) *In tatam elatus est mentis superbiam, ut magis sub proprio quam sub Domini dominio esse eligeret, dicens in corde suo: 'Ponam sedem meam ad aquilonem, similis ero Altissimo.*

この外、スベルビアのシンボルとしてのアレクサンドロス大王に関しては特に次の古文献を参照。Rupertus Abb. Tuitiensis *De victoria verbi dei*, lib. IX, cap. XII (Migne, P.L., CLXIX, col. 1408); Berthold von Regensburg, *Seiner Predigten*, Vol. I (ed. F. Pfeiffer, Wien 1862, S. 388 ff.).

- (31) STAMMLER Sp. 334; H. Aurenhammer, *Alexanders Luftfahrt (Greifenfahrt)*, in: *Lexikon der christlichen Ikonographie*, Wien 1962, S. 85 f.; H. Sachs, E. Badstrübner und H. Neumann, *Christliche Ikonographie in Stichworten*, München 1973, S. 24 f.
- (32) SETTIS-FRUGONI S. 239; LANGEDIJK S. 285.
- (33) SETTIS-FRUGONI S. 242 ff.
- (34) W. Kroll, *Historia Alexandri Magni (Pseudo-Callisthenes)*, Vol. I, *Recensio Vetusta*, Berlin 1926.

Cod. grec. 1685)³⁵⁾にも空中飛行のエピソードは含まれていないのである。しかしながらこの話は、15世紀にシシリー島で作製されたと推定されるギリシア語写本 L (Leyden, Univ. Bibl., Cod. Vulcanius 93)³⁶⁾ならびに写本 L と類似の三点のギリシア語写本³⁷⁾、さらに、最も年代の新しいリセンションである γ のギリシア語写本 C (Paris, Bibl. Nat. Cod. suppl. grec. 113, 1567年)³⁸⁾には第二書の終り (II, 41) に記されている³⁹⁾。

これらの偽カリステネス写本では、空中飛行の話は、アレクサンドロス大王が彼の母オリンピアスに宛てて書いたという手紙（それらには彼が東方で行なった様々の冒険や、彼がそこで見た巨大な鳥や珍しい動物などが記されている）の一つに述べられているが、写本 C における該当個所のギリシア語テキスト (G. ミレの校訂による) ならびにその試訳⁴⁰⁾

は、本稿冒頭に掲げた通りである（文中、丸印の中の数字は G. ミレによる校合の行数を、また [] は写本 L ないし写本 V・Ob・Om によって補われるべき個所を示す）。

前述のように、偽カリステネスの『アレクサンドロス物語』を西欧世界に広めたのはその二種類のラテン語訳であるが、空中飛行のエピソードに関してはレオによるラテン語訳が決定的な影響を及ぼしたものと思われる。ヴァレリウスのラテン語には、この話は欠けているからである。レオが手本としたギリシア語写本 (リセンション δ)⁴¹⁾ そのものも、また、レオのラテン語訳原本 (968/69年頃) も共に現存しないが、しかし1000年頃南イタリアで筆写された写本 Ba (Bamberg, Staatsbibliothek, Cod. E. iii. 14)⁴²⁾、および、1300年頃の写本 L (London, Lambeth Palace, Cod. 342)⁴³⁾ が今日伝えられている。

(35) C. Müller, *Scriptores rerum Alexandri Magni. Pseudo-Callisthenes*, in F. Dübner, *Arriani Anabasis et Indica*, Paris 1846. なお、リセンション β については L. Bergson, *Der griechische Alexanderroman, Rezension β*, Uppsala 1965 を参照。

(36) H. Meusel, *Pseudo-Callisthenes, nach der Leidener Handschrift herausgegeben*, in: *Jahrbücher f. klass. Philologie und Pädagogik, Neue Folge, Supplementband V*, Leipzig 1871, S. 767. 写本 L は、全体としては写本 B に一致するが、部分的には写本 A および写本 C と重なる写本である。

(37) V (W)=Vat. Gr. 171 (16世紀); Ob (O)=Bodl. Barocc, 23 (14世紀); Om (P)=Bodl. Misc. 283 (16世紀). これらの写本のテキストについては MILLET S. 90 ff. を参照。

(38) C. Müller, op. cit., S. 91; H. Engelmann, *Der griechische Alexanderroman, Rezension Γ*, (Beitr. zur klass. Philol., hrsg. v. R. Merkelbach, H. 12), Meisenheim am Glan 1963, S. 315. なお、写本 C に関しては, J. Zacher, *Pseudocallisthenes: Forschung zur Kritik und Geschichte der ältesten Aufzeichnungen der Alexandersage*, Halle 1867, S. 10 も参照。

(39) C. セッティス=フルゴニは、アレクサンドロスの空中飛行の話はローマ皇帝アレクサンデル・セヴェルス (222-235) の時代に成立したものと考えている (SETTIS-FRUGONI S. 131)。かつて A. アウスフェルト (A. Ausfeld, *Der griech. Alexanderroman*, Leipzig 1907) は、偽カリステネス第 II 書 23-41 を後代の書入れ (Interpolation) と推定したが、今日この説は支

レオのオリジナルに最も近いとされるラテン語写本である写本 Ba (III, 17)⁴⁴⁾ によれば、紅海から程遠からぬ地点まできたアレクサンドロス大王は、ほとんど空まで達したと思う程高く山に登り、次いで、いかにしたら実際に天まで昇れるような仕掛け (Ingenium) を作ることができるか、思いを巡らせたという。

Cogitavi cum amicis meis, ut instruerem tale ingenium, quatenus ascenderem celum et viderem, si est hoc celum, quod videmus. Preparavi ingenium, ubi sederem, et apprehendi grifas atque ligui eas cum catenis. Et posui vectes ante eos et in summitate eorum cibaria illorum ceperunt ascendere celum. Divina quidem virtus obumbrans eos deiecit ad terram longius ab exercitu meo iter dierum decem in loco campestri et nullam lesio-

nem sustinui in ipsis cancellis ferreis. Tantam altitudinem ascendi, ut sicut area videbatur esse terra sub me. Mare autem ita videbatur mihi, sicut draco girans ea et cum forti angustia iunctus sum cum militibus meis.

「私は私の友人たちと、いかにしたら、私が天に昇って、そして我々が見ているものが天であるかどうかを確かめられるような仕掛けを作ることができるかを相談した。私は、私が坐れる装置を準備し、そしてグリフィンを捕えて、それらを鎖でつないだ。そして、グリフィンどもの前に竿と、その先には餌を据えた。するとグリフィンどもは天に昇り始めた。しかしながら天上の力がグリフィンどもをおおい、そして地上に投げ下ろした。そこは私の軍隊から10日以上^{みちのり}の道程を離れた平地だった。そして私は鉄の格子の中にいたが

持されていない。これについては、Melkelbach, op. cit., S. 47 f. を参照。

- (40) MILLET S. 91-95. なお、ギリシア語テキストの和訳に際しては、塚田孝雄氏ならびに跡見学園女子大学助教授福部信敏氏の御教示を頂いた。ここに記して謝意を表する次第である。
- (41) リセッション δ に属するギリシア語写本はこれまで全く知られていなかったが、近年、断片的にはあるが発見された。これについては、G. Ballaira, Frammenti inediti della perduta recensione δ del Romanzo di Alessandro in un codice vaticano, in: Boll. del Comitato per la preparazione dell'ediz. naz. dei classici gr. e lat., Acc. Naz. Lincei, XIII (1965), S. 27 ff.; Idem, Sul Romanzo di Alessandro, ibidem, XVI (1968), S. 1 ff. を参照。

(42). F. Pfister, op. cit.

(43) D.J.A. Ross, A New Manuscript of Archpriest Leo of Naples, Nativitas et victoria Alexandri Magni, in: Classica et Mediaevalia, 20, 1959, S. 98 ff.

(44) F. Pfister, op. cit., S. 126; O. Zingerle, Die Quellen zum Alexander des Rudolf von Ems. Im Anhang: Die Historia de preliis, Germ. Abhandlungen IV, Breslau 1885, S. 48 (Anm. 4); G. Landgraf, Die vita Alexandri Magni des Archipresbyters Leo (Historia de preliis), Erlangen 1885, S. 131; MILLET S. 100.

なお、Historia de Preliis I² の該当箇所については O. Zingerle, op. cit., S. 252 f. を参照。

怪我をしなかった。私は地上が私の下で広場のように見える程高く昇った。一方、海は私には大地を取り巻くへびのように見えた。非常に苦勞して私は私の兵士たちのもとに戻った。」

VI

このレオのラテン語訳と前述の偽カリステネスのギリシア語写本における記述を比較してみると、空中飛行の美術表現にとり重要な相異点が見出される。すなわち、偽カリステネスにおいては、アレクサンドロスを空中に運ぶのは二羽の鳥 (*δρυις*) であるのに対して、レオではグリフィン (*grifas*)⁽⁴⁵⁾ となっている点である。テキストの制約を受けるのが普通である写本挿絵の場合(例えば、Berlin, Kupferstichkabinett, Cod. 78. C. 1 のミニアチュールでは、『古フランス語散文体アレクサンドロス物語』のテキストに従って16頭のグリフィンが描かれている。作品カタログ60番参照)⁽⁴⁶⁾を除外すれば、ビザンチンならびに西欧世界の作例の大多数が、アレクサンドロス大王を中央に、そしてその左右にグリフィンを

各1頭ずつ配する、シンメトリカルな構図⁽⁴⁷⁾をとるだけに、この差異は注目に値する。

グリフィンではなく驚ないし鳥がアレクサンドロスに天に運ぶタイプの作例としては、わずかに、10世紀・ビザンチンならびに12世紀・ドイツの刺繍作品(作品カタログ2, 87番参照)、モワサック大聖堂の12世紀の柱頭浮彫(作品カタログ36番参照)、および、トゥアールのバレ美術館所蔵の12世紀・フランスの柱頭浮彫(作品カタログ37番参照)が挙げられるにすぎない。

グリフィンのモチーフが、翻訳の際にレオが手本とした偽カリステネスのギリシア語写本(リセンションδ)にすでに含まれていたのか、あるいは、レオがラテン語訳の際に手本に変更を加えたのか⁽⁴⁸⁾、これについては必ずしも明らかではないが、いずれにせよ、アレクサンドロスの空中飛行を表わす最古の現存作例(モンペザ・ド・クェルシーにある7世紀のコプト織り断片、作品カタログ1番参照)に、すでにこのモチーフは見出される。ここではグリフィンが、アレクサンドロス大王の乗る二輪車に繋がれているのである。

(45) グリフィンの数は写本 Ba では特に規定されていないが、バリ国立図書館の13世紀の *Historia de Preliis I* 写本 (Cod. lat. 8501) における、該当箇所のラテン語註釈では4頭となっている。

fol. 85v: *Quattuor hic griffes praecepit esse simul. / Illos ad currum miserat rex inde ligari / Cum ferri vinclo quo bene tutus erat. / In summo currus illorum ponitur esca...* (MILLET S. 102 参照)

なお、グリフィンのイコノグラフィーについては

SETTIS-FRUGONI S. 25 ff. および I. Wegner, *Studien zur Ikonographie des Greifen in Mittelalter*, Diss. Freiburg i. Br. 1928 を参照。

(46) 『ロマン・ダレクサンドル』(アレクサンドル・ド・バリ Alexandre de Paris 版) のテキストではグリフィンの数は7又は8であるが、この写本のミニアチュールでは多くの場合4頭のみである。作品カタログ63-65番参照。

(47) 無論、シンメトリカルな構図をとらない作例も例外

この最古の現存作例を初めとして、ビザンチンおよびその影響下にある地域の美術においては——例えば、ヴェネツィアのサン・マルコ大聖堂北側ファサードにはめ込まれた11/12世紀・ビザンチンの浮彫（作品カタログ6番参照）や、イスタンブールのハギア・ソフィア大聖堂内側ナルテックスの浮彫（12/13世紀、作品カタログ7番参照）、あるいは、エルミタージュ美術館所蔵の10世紀・ビザンチンの鉛製印章（作品カタログ19番参照）などに見られるように——アレクサンドロス大王が二輪車に乗って昇天する様を表わす作例が数多く見出される。終局的には古代のヘリオス Helios（太陽神）の車ないし凱旋車に遡る、この二輪車のモチーフ⁴⁹⁾については、しかしながら、偽カリステネスもレオも共に特に言及していない。

すなわち、偽カリステネスの写本 C では、「さて三日目に木材を輓そっくりに組み立てて、これを鳥どもの頸に結びつけた。それから〔 〕彼は（輓の）真ん中に乗り込み……」（本稿冒頭のギリシア語テキスト参照）としか記されていないのである。もっとも写本 L

（およびこれと類似の写本 V ならびに Ob）では、アレクサンドロス大王の乗物についてより一層の説明がなされている。これらの写本では、先の写本 C からの引用文中の「それから〔 〕」に続いて

④8 [Ἐἶτα προσέταξα βύρσαν ἐνεχθῆναι] καὶ ταύτην προσδεθῆναι ἐν μίσθῳ τοῦ ζυγοῦ. ⑤1 Ταύτην δὲ κατεσκευάσα ὥσπερ σπυρίδα

καὶ εἰς ἤλθον ἐγὼ

（〔 〕内は写本 Om より補充）

「④8それから牛の皮を持って来させ、これを輓の中央に結びつけるよう命じた。

⑤1この皮を籠のように組み立てると」
となっており、一種の籠の中にアレクサンドロス大王が乗り込んだことが記されている。これに対して、レオのテキストはアレクサンドロスの乗物に関して

Preparavi ingenium, ubi sederem ...

「私は、私が坐れるように装置を準備し……」と漠然と述べているだけである。

籠形の乗物（あるいはそれに類するもの）に乗って昇天するアレクサンドロス大王を表

的には見出される。例えば、ロンドン個人蔵の12世紀・ライン地方のエマールがそれであるが、ここではアレクサンドロスはプロフィールで表わされ、右上に向かって上昇する（作品カタログ86番参照）。なお、シンメトリカルな構図の空中飛行図がササン朝起源のものであるという指摘については、STAMMLER Sp. 336 および H. Aurenhammer, op. cit., S. 85 f. を参照。

(48) E. ヘルツフェルト (HERZFELD S. 132) は、2頭のグリフィスがシンメトリカルに配された空中飛行のイ

コノグラフィーは、偽カリステネスの『アレクサンドロス物語』に由来するものであり、このタイプはビザンチン織物を通じて各地に広められたと推定している。一方、W. シュタムラー (STAMMLER Sp. 335) は、グリフィスのモチーフをレオのラテン訳に帰している。なお、シンメトリカルな構図をもつ空中飛行図と織物模様との関連については次の文献を参照。 GRAEVEN S. 270; PANZER S. 11.

(49) これについては PANZER S. 11 参照。

わす作例は、ビザンチン美術（例えば、アトス山ドヒアリウ修道院の12/13世紀の浮彫、作品カタログ8番参照）においても見られるが、このモチーフは概して、西方のモニュメンタルな作例に多く見出される。その好例として、ナルニのサン・ドメニコ聖堂ファサードの浮彫（12世紀末、作品カタログ32番参照）、バーゼル大聖堂内陣周廊の柱頭浮彫（12世紀後半、作品カタログ33番参照）、フライブルク大聖堂の柱頭浮彫（13世紀初頭、作品カタログ34番参照）などが挙げられよう。

西欧の作例にはこの外、フィデンツァ大聖堂ファサードの浮彫（1180年頃、作品カタログ31番参照）の場合のように、アレクサンドロス大王が玉座について昇天するタイプもあるが、これは偽カリステネスよりむしろレオのテキストとの関連を暗示するものと見るべきであろう。この玉座のタイプは、特にドイツの写本挿絵に多く見出される。ヤンセン・エニーケルの『世界年代記』（特にレーゲンスブルク本、作品カタログ69番参照）やドイツ語『歴史聖書』（特にミュンヘン本、作品カ

タログ78番参照）におけるアレクサンドロスのセクションでは、乗物として椅子“sezzel”（=Sessel）が述べられているからである。これに対して『古フランス語散文体アレクサンドロス物語』のテキストでは鳥籠“la cage”（作品カタログ54番参照）となっているが、ミニアチュールは必ずしもテキストに忠実ではない。作品カタログ55番の場合のように、家型の乗物が描かれる場合もあれば、作品カタログ58, 60, 62番のように椅子駕籠の場合もある。

VII

本稿は、伝説的な偽カリステネスの『アレクサンドロス物語』中の一つのエピソードである空中飛行をテーマとした美術作品例の収集とそのカタログ作製を主目的とした資料集成の試みであるが、いかにこの古代的=世俗的テーマが西洋中世世界においてポピュラーなものであったかは、本稿の作品カタログにリスト・アップされた作品の数がすでに示すところである⁵⁰⁾。しかもそれらのうちに、例

(50) E. マール (MÂLE S. 271) は、空中飛行の話を西欧に広めたのはトルバドーレであると考えている。なお、文学・美術におけるアレクサンドロス大王の空中飛行については、すでに挙げたものの外に次の文献も参照。G. Boffito, *La leggenda aviatoria d'Alessandro Magno nella letteratura e nell'arte*, in: *La Bibliofilia*, XXII, 1920/21, S. 316 ff.; Idem, *Le figurazioni d'Alessandro Magno. Appendice*, in: *La Bibliofilia*, XXIII, 1921/21, S. 268 ff.

(51) O. Demus, *Elijah and Alexander*, in: *Studies in Memory of David Talbot Rice*, Edinburgh 1975, S. 64 ff.; E. Breitenbach, *Speculum humanae salvationis*, (*Studien zur deutschen Kunstgeschichte* H. 272), Straßburg 1930, S. 241 (Anm. 2); E. Riefstahl, *A Coptic roundel in the Brooklyn Museum*, in: *Coptic Studies in Honor of W. E. Crum* (The Byzantine Institute, 1950), S. 539.

えば、オックスフォードのアシュモレアン美術館蔵のいわゆる〈アルフレッド宝石〉(9世紀末、作品カタログ15番参照)とか、ヴェネツィアのサン・マルコ大聖堂にある〈バラ・ドーロ〉のエマーユ(11世紀、作品カタログ16番参照)といった、きわめて簡略化された作例が含まれているという事実は、中世におけるこのテーマのポピュラリティーを一層裏づけるものに外ならない。きわめて単純化された表現であっても容易に理解されたものと思われる。さらに、O. デームス教授その他が指摘したように⁵¹⁾、アレクサンドロス大王の空中飛行の構図が他の場面のイコノグラフィ、とりわけ「エリアの昇天」のそれ(例えば、南オーストリアのグルク大聖堂ナルテックスの14世紀の壁画)に影響を及ぼしたということも、注目すべき事実である。

中世において人気を博したアレクサンドロス大王物語のテーマも、近世の始まりと共に根本的な変化を被ることになった。偽カリステネスおよびその後継者たちの空想的な物語に基づいた伝説的なアレクサンドロス像は、歴史的人物としてのそれにとって代わられたからである。それと同時に、アレクサンドロス大王は中世における象徴的、道徳的意味を失い、以後もっぱら歴史画の中に登場することになる。空中飛行のテーマも、ハンス・L・ショイフェラインの一枚刷木版画(16世紀初頭、作品カタログ91番参照)を最後に美術の中からその姿を消した。

Werkkatalog der Bildzeugnisse der Luftfahrt Alexanders des Grossen

Zusammengestellt von Koichi KOSHI

Die Erzählung von der Luftfahrt Alexander des Großen:

Nach der *Nativitas et victoria Alexandri Magni regis (oder Historia de Preliis)* des Archipresbyters Leo von Neapel, der in der zweiten Hälfte des 10. Jhdts. den spätgriechischen Alexanderroman des Pseudo-Kallisthenes (das dritte Jhd.) ins Lateinische übersetzte, berichtet Alexander in einem Brief an seine Mutter, er habe mit seinen Freunden überlegt, wie er zum Himmel emporfliegen könne, um festzustellen, ob das, was wir sehen, der Himmel ist: „Ich erfand ein Behältnis, in dem ich sitzen konnte, erfaßte Greifen und band sie mit Ketten an; den Greifen hielt ich Stangen vor, an deren Spitze Lockspeisen befestigt waren, und sie begannen, zum Himmel emporzufliegen. Eine göttliche Gewalt überschattete sie aber und trieb sie zur Erde hinab auf ein Feld, das weiter als 10 Tagesmärsche von meinem Heer entfernt war, doch wurde ich in meinem eisernen Behältnis nicht verletzt. Ich erreichte eine solche Höhe, daß die Erde unter mir wie eine Tenne erschien und das Meer wie ein Drache, der sie umschlingt . . .“

(nach STAMMLER Sp. 335)

Der Katalog verzeichnet sämtliche Bildzeugnisse der Luftfahrt Alexanders des Grossen, von denen der Verfasser Kenntnis habe.

I. Byzanz und sein Einflußbereich	Kat. Nr.
a) Textilkunst	1—4
b) Plastik und Elfenbeinarbeiten	5—15
c) Emailarbeiten	16—18
d) Metallarbeiten	19—24
II. Westliche Kirchengeschmückung (Plastik und Mosaiken)	
a) Italien	25—32
b) Deutschland	33—35
c) Frankreich	36—40
d) England	41—51
III. Westliche Handschriftenillustrationen	
a) <i>Historia de Preliis</i>	52—53
b) Der altfranzösische Prosa-Alexanderroman	54—62
c) <i>Roman d'Alexandre</i> und Jehan Wauquelin's <i>Histoire du Bon Roy Alixandre</i>	63—68
d) Jansen Enikels <i>Weltchronik</i>	69—76
e) <i>Historienbibel</i>	77—80
f) Sonstige	81—85
IV. Übrige westliche Bildzeugnisse	86—91
V. In zeitgenössischer Literatur genannte Bildzeugnisse	92—94
VI. Bildzeugnisse mit irrtümlichem oder fraglichem Bezug auf die Luftfahrt Alexanders	95—118

Unter der Literatur zu den Denkmälern sind folgende häufig zitierten Arbeiten mit Kurztiteln verzeichnet:

- BERTAUX É. Bertaux, *L'art dans l'Italie Méridionale*, I, Paris 1904.
- BERTELLI C. Bertelli, Alessandro III di Macedonia, in: *Enciclopedia dell'arte antica*, I, Rom 1958, S. 243 ff.
- BOND F. Bond, *Wood Carvings in English Churches*, I.—*Misericords*, London etc. 1910.
- BRÉHIER L. Bréhier, *La sculpture et les arts mineurs*, Paris 1936.
- CAHIER Ch. Cahier, *Nouveaux Mélanges d'Archéologie*, I: *Curiosités mystérieuses*, Paris 1874.
- CARY G. Cary, *The Medieval Alexander*, Cambridge 1956.
- DODGSON C. Dodgson, Alexander's Journey to the sky: a woodcut by Schauflein, in: *The Burlington Magazine*, 6, 1904/05, S. 395 ff.
- GRABAR A. Grabar, Images de l'Ascension d'Alexandre en Italie et en Russie, in: *ΧΑΡΙΣΤΗΡΙΟΝ ΕΙΣ Α.Κ. ΟΡΑΙΑΝΔΟΝ*, II, Athen 1964, S. 240 ff.
- GRAEVEN H. Graeven, Mittelalterliche Nachbildungen des lysippischen Herakleskolosses, in: *Bonner Jahrbücher*, Heft 108/109, S. 252 ff.
- DURAND J. Durand, Légende d'Alexandre le Grand, in: *Annales archéologiques*, 25, 1865, S. 141 ff.
- FRANCOVICH G. de Francovich, Benedetto Antelami, Architetto e scultore e l'arte del suo tempo, 2 Bde., Mailand—Florenz 1952.
- GOLDSCHMIDT A. Goldschmidt, Der Albanipsalter in Hildesheim und seine Beziehung zur symbolischen Kirchenskulpturen des XII. Jahrhunderts, Berlin 1895.
- HAMANN R. Hamann, Motivwanderungen von West nach Osten, in: *Wallraf-Richarz-Jahrbuch*, 3/4, 1926/27, S. 49 ff.
- HERZFELD E. Herzfeld, Der Thron des Khosro, Quellenkritische und ikonographische Studien über Grenzgebiete der Kunstgeschichte des Morgen- und Abendlandes, in: *Jahrbuch der preußischen Kunstsammlungen*, 41, 1920, S. 123 ff.
- HOLL O. Holl, Alexander der Große, in: *Lexikon der christlichen Ikonographie*, I, Rom—Freiburg—Basel—Wien 1968, S. 94 ff.
- HÜBNER A. Hübner, Alexander der Große in der deutschen Dichtung des Mittelalters, in: *Die Antike*, 9, 1933, S. 32 ff.
- LANGEDIJK K. Langedijk, Rezension: C. Settis-Frugoni, *Historia Alexandri Elevati per Griphos ad Aerem* (Rom 1973), in: *The Art Bulletin*, 58, 1976, S. 283 ff.
- LOOMIS R. S. Loomis, Alexander the Great's celestial journey, in: *The Burlington Magazine*, 32, 1918, S. 136 ff. u. S. 177 ff.

- L'ORANGE H. P. L'Orange, *Studies on the Iconography of Cosmic Kingship in the Ancient World*, Oslo 1953, S. 118 ff.
- MÂLE É. Mâle, *L'art religieux du XIIe siècle en France*, Paris 1953 (6. Aufl.).
- MEISSNER A. L. Meißner, *Bildliche Darstellungen der Alexander sage in Kirchen des Mittelalters*, in: *Archiv für das Studium der neueren Sprachen und Literaturen*, 68, 1882, S. 177 ff.
- MILLET G. Millet, *L'ascension d'Alexandre*, in: *Syria*, 4, 1923, S. 85 ff.
- ORLANDOS A. K. Orlandos, *Νέον ανάγλυφον τῆς ἀναλήψεως τοῦ Ἀλεξάνδρου*, in: *Ἐπιστημονική Ἐπετηρὶς τῆς φιλοσοφικῆς Σχολῆς τοῦ Πανεπιστημίου Ἀθηνῶν*, Serie II, Vol. V (1954–1955) [= *Ἀφιέρωμα εἰς Νιχόλαον Ἐξαρχόπουλον*], S. 281 ff.
- PANZER Fr. Panzer, *Der romanische Bilderfries am südlichen Choreingang des Freiburger Münsters und seine Deutung*, in: *Freiburger Münsterblätter*, 2, 1906, S. 1 ff.
- PFISTER F. Pfister, *Alexander der Große in der bildenden Kunst*, in: *Forschungen und Fortschritte*, 35, 1961, S. 331 ff.
- POPPEN H. Poppen, *Alexanders Greifenfahrt am Freiburger Münster und die mittelalterlichen Typen der Alexander-Fahrt*, in: *Festschrift der Verbindung Cimbria*, Dortmund 1926, S. 162 ff.
- REMNANT C. L. Remnant, *A Catalogue of Misericords in Great Britain, with an Essay on their Iconography* by M. D. Anderson, Oxford 1969.
- RICE D. T. Rice, *New light on the Alfred Jewel*, in: *The Antiquaries Journal*, 36, 1956, S. 214 ff.
- ROSS 1963 D.J.A. Ross, *Alexander historiatus, A Guide to Medieval Illustrated Alexander Literature*, (Warburg Institute Surveys, I), London 1963.
- ROSS 1971 D.J.A. Ross, *Illustrated Medieval Alexander-Books in Germany and the Netherlands, A study in comparative iconography*, Cambridge 1971.
- SCHNÜTGEN A. Schnütgen, *Die kunsthistorische Ausstellung in Düsseldorf*, in: *Zeitschrift für Christliche Kunst*, XV, 1902, Sp. 177 ff.
- SETTIS-FRUGONI C. Settis-Frugoni, *Historia Alexandri Elevati per Grifhos ad Aerem (Origine, iconographia, e fortuna di un tema)*, Rom 1973.
- STAMMLER W. Stammler, *Alexander d. Gr.*, in: *Reallexikon zur deutschen Kunstgeschichte*, I, Stuttgart 1937, Sp. 332 ff.
- STRZYGOWSKI M. v. Berchem und J. Strzygowski, *Amida*, Heidelberg 1910.
- SUPKA G. Supka, *Beiträge zur Darstellung der Luftfahrt Alexanders des Großen*, in: *Zeitschrift für Christliche Kunst*, 24, 1911, Sp. 307 ff.
- WARD H.L.D. Ward, *Catalogue of romances in the Department of manuscripts in the British Museum*, I, London 1883.
- WARNER/GILSON G.F. Warner und J.P. Gilson, *Catalogue of Western Manuscripts in the Old Royal and King's Collection in the British Museum*, II, Oxford 1920.

I. Byzanz und sein Einflußbereich

a) Textilkunst

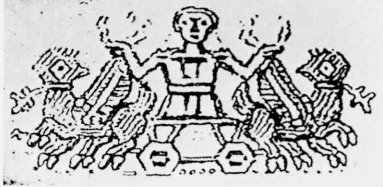
1

Montpézat-de-Quercy (Frankreich), Stiftskirche St. Martin.

Wahrscheinlich koptisch, 7. Jh. Leinwandgewebe (Fragment), das als Umhüllung einer Reliquie in der Stiftskirche in Montpézat diente.

Ältestes erhaltenes Beispiel der Darstellung der Luftfahrt Alexanders: der Mazedonierkönig, der in beiden Händen zwei Kränze hält, fährt mit dem Greifenwagen.

F. Pottier, *Tissu historié représentant la légende d'Alexandre*, in: *Bull. Archéol. et Histor. de la Soc. archéologique de Tarn et Garonne*, XXX, 1902, S. 289 u. Taf. 40; Idem, in: *Beilage zur Allg. Zeitung*, Nr. 269, Nov. 1903, S. 382 f.; PANZER S. 11; G. Migeon, *Les Arts du Tissue*, Paris 1909, S. 17; C. Picard, *Le Trône vide d'Alexandre dans la cérémonie de Cyinda et le culte du trône vide à travers le monde gréco-romain*, in: *Cahier archéologiques*, VII, 1954, S. 14 ff.; BERTELLI S. 244; SETTIS-FRUGONI S. 82, 150 ff. u. Fig. 31.



2

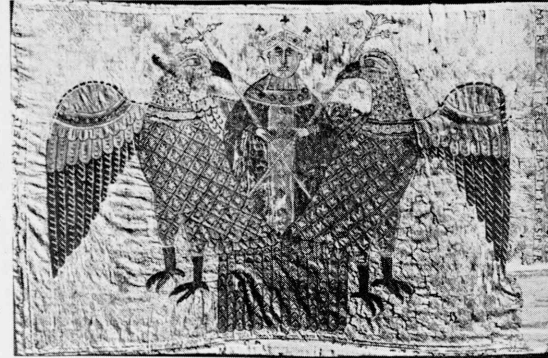
Würzburg, Luitpold Museum.

Eine byzantinische Nadelmalerei vermutlich aus dem 10. Jh., die 1266 auf die sog. Kilians-(Chriacus-)fahne in Würzburg aufgenäht wurde.

Die Inschrift: *Cum paucis promere versi[culis] Miracula poli libuit pro spir[itu sanctu] asp[icere]*.

Die Stickerei stellt nicht ganz eindeutig Alexanders Luftfahrt dar. Es fehlt eine Verbindung des Königs mit den Vögeln: keine Andeutung eines Korbes oder Thrones, an dem die Adler (!)—statt Greifen—befestigt wären. Anstatt der Stangen mit Fleischködern trägt Alexander zwei Lilienzepter in den Händen.

PANZER S. 10; LOOMIS S. 140; STAMMLER Sp. 340; F. Pfister, *Alexander der Große und die Würzburger Kiliansfahne*, in: *Herbipolis jubilans* (Würzburger Diözesangesichtsblätter 14/15), Würzburg 1952/53, S. 268 ff.; S. Müller-Christensen, *Sakrale Gewänder des Mittelalters* (Ausstellungskatalog), München 1955, S. 14; A. Grabar, in: *Kunstchronik*, VII, 1955, S. 310; M. Schütte, S. 27 u. Abb. 34—36; von Hefner-Alteneck, *Trachten, Kunstwerke und Gerätschaften des Mittelalters*, 2. Aufl., I, S. 17 u. Taf. 29; SETTIS-FRUGONI S. 159 f. u. Fig. 37; LANGEDIJK S. 284 f.



3

Krefeld, Museum.

Byzantinisch-Regensburgischer Stoff (Fragment), 11—12. Jh.

J. Lessing, *Die Gewerbesammlung des Königl. Kunstgewerbe-Museums*, Berlin 1900, II, Taf. 98b; A. F. Kendrick, *Catalogue of Early Medieval Woven Fabrics* (Victoria and Albert Museum, Department of Textiles), London 1925, S. 59; J. H. Schmidt, *Deutsche Seidenstoffe des Mittelalters*, in: *Zeitschrift des Deutschen Vereins für Wissenschaft*, I, 1934, S. 109; SETTIS-FRUGONI S. 156 u. Fig. 35.



Ehem. Berlin, Schlossmuseum.

Byzantinisch-Regensburgischer Halbseidenstoff, 13. Jh.

In einem gemusterten Kübel thront der König, die angespießten Ferkel in die Höhe hebend.

J. Lessing, Die Gewerbesammlung des Königl. Kunstgewerbe-Museums, Berlin 1900, I, Fig. 81; SCHNÜTGEN S. 180; Fischbach, Die wichtigsten Weberornamente, Taf. 112; LOOMIS S. 178 u. Taf. II/M; J. H. Schmidt, Deutsche Seidenstoffe des Mittelalters, in: Zeitschrift des Deutschen Vereins für Wissenschaft, I, 1934, S. 109 u. Fig. 17; STAMMLER Sp. 337; J.H. Schmidt, Alte Seidenstoffe, Braunschweig 1958, S. 259 u. Fig. 237; SETTIS-FRUGONI S. 154 f. u. Fig. 34.



b) Plastik und Elfenbeinarbeiten

Theben (Böotien), Museum (Inv. Nr. 258).

Byzantinische Marmorreliefplatte (Fragment), deren Herkunft unbekannt ist. 10.—11. Jh.

POPPEL S. 169; Schauinsland, 51—53, 1926, S. 100; STAMMLER Sp. 337; A.K. Orlandos, *Γλυπτὰ τοῦ Μουσείου Θεβῶν*, in: *Ἀρχαῖον τῶν βυζαντινῶν τῆς Ἑλλάδος*, V (1939—40), S. 119 ff.; L'ORANGE S. 120 u. Abb. 87; ORLANDOS S. 281 ff. u. Taf. 1/β; RICE S. 215; BERTELLI S. 245; SETTIS-FRUGONI S. 164 f. u. Fig. 41.



Venedig, San Marco, Nordfassade.

Byzantinische Marmorreliefplatte, deren Herkunft nicht bekannt ist. 11.—12. Jh.

Über einem Wagen erscheint der Oberkörper Alexanders in der Tracht eines byzantinischen Kaisers. In beiden Händen hält Alexander Stangen, auf deren Spitzen Hasen(?) als Köder für die Greifen gesteckt sind.

DURAND S. 147; BERTAUX S. 490; STRZYGOWSKI S. 350



ff. u. Abb. 296; SUPKA Sp. 309 ff. u. Abb. 2; O.M. Dalton, *Byzantine Art and Archaeology*, Oxford 1911, S. 159; LOOMIS S. 139 u. Taf. I/E; HERZFELD S. 128 f. u. Abb. 26; HAMANN S. 51; HÜBNER Abb. 8; BRÉHIER Taf. XXI; STAMMLER Abb. 3; ORLANDOS Taf. 2/α u. S. 287; FRANCOVICH f. LXXXII (S. 351); RICE S. 215; O. Demus, *The Church of San Marco in Venice*, Washington 1960, S. 111 ff. u. Abb. 33; W. F. Volbach u. J. Lafontaine-Dosogne, *Byzanz und der christliche Osten*, Berlin 1968, Abb. 108; SETTIS-FRUGONI S. 164 u. Fig. 40.

7

Istanbul, Hagia Sophia, Esonarthex.

Byzantinische Marmorreliefplatte (Fragment einer Ziborium-Archivolte).

12.—13. Jh.

ORLANDOS Taf. 1/α u. S. 281; SETTIS-FRUGONI S. 161 f. u. Fig. 39.



8

Athos, Dochiariu.

Byzantinische Reliefplatte, 12.—13. Jh.

H. Brockhaus, *Die Kunst in den Athos-Klöstern*, Leipzig 1891, S. 41; PANZER Abb. 6; STRZYGOWSKI



S. 352 u. Abb. 299; STAMMLER Sp. 337; ORLANDOS S. 285 u. Taf. 2/β; SETTIS-FRUGONI S. 165 f. u. Fig. 42.

9

Mistra, Peribleptos.

Byzantinische Reliefplatte, 14. Jh.

STRZYGOWSKI S. 351 f. u. Abb. 298; LOOMIS S. 139 u. Taf. 1/D; STAMMLER Sp. 337; ORLANDOS S. 285 u. Taf. 2/γ; SETTIS-FRUGONI S. 165 f. u. Fig. 43.



10

Haho (Hahoul, Nordöstliche Türkei), Klosterkirche, Außenwand.

Byzantinisch beeinflusste Reliefplatte, 10. Jh.

Alexander, der über dem Wagen erscheint, hält in beiden Händen die gekreuzten Lanzen mit dem Köder.

D. Winfield, *Some Early Medieval Figure Sculpture from North-East Turkey*, in: *Journal of the Warburg and Courtauld Institutes*, 31, 1968, S. 33 ff. u. Fig. 3 u. 5; Ch. S. Frugoni, *An 'Ascent of Alexander'*, in: *Journal of the Warburg and Courtauld Institutes*, 33, 1970, S. 305 ff.; SETTIS-FRUGONI S. 189 ff. u. Fig. 58—59.



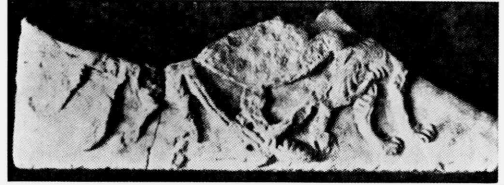
11

Wladimir, Marientodskathedrale, Südfassade.
Russisch, 1158—1160. Gehämmert.

GRABAR S. 244 f. u. Taf. II/b; A. Grabar, *L'Art profane en Russie pré-mongole et le «Dit d'Igor»*, in: *L'Art de la fin de l'antiquité et du Moyen Âge*, I, Paris 1968, S. 301 ff.; SETTIS-FRUGONI S. 169 u. Fig. 44.



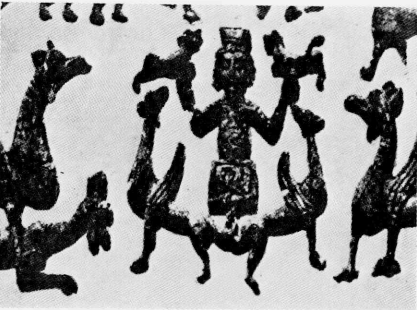
N. N. Voronin, *Architektur im nordöstlichen Russland*, 12.—15. Jh. (auf Russisch), Moskau 1961, I, S. 208 u. Abb. 64, u. II, Abb. 56; GRABAR S. 246, Fig. 2 u. Taf. III/a; SETTIS-FRUGONI S. 172 u. Fig. 46—47.



12

Wladimir, St. Dimitri, Südfassade.
Russisch, 1198—1199.

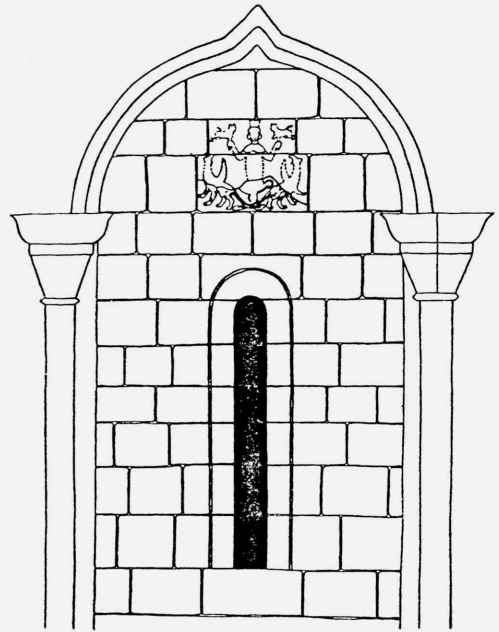
PANZER Abb. 9; A. Bobrinskoi, *Reznoi kamen' v Rossij*, Moskau 1916, Taf. 12—3; F. Halle, *Die Bauplastik von Wladimir-Ssusdal*, Russische Romanik, Berlin—Wien—Zürich 1929, Taf. 18; GRABAR S. 244 u. Taf. II/a; A. Grabar, *Die mittelalterliche Kunst Osteuropas*, Baden-Baden 1968, S. 137; SETTIS-FRUGONI S. 170 u. Fig. 45.



13

Juriew-Polski (Region von Wladimir), St. Georgskirche.

Russisch, um 1234. Fragment. Ursprünglich war das Relief vermutlich in der Südfassade angebracht.



14

Darmstadt, Hessisches Landesmuseum (Inv. 33. 36).

Stirnseite eines byzantinischen Elfenbeinkästchens. 10.—11. Jh.

Alexander in byzantinischer Kaisertracht ragt aus dem korbartigen Wagen heraus. Seine Rechte hält eine Gabel mit dem Köder, seine Linke einen jetzt abgebrochenen Gegenstand (Reichsapfel?). Geflügelte Genien, die die Greifen krönen, und die beiden anderen Putten gehören ursprünglich nicht zur Greifenfahrt.



14

GRAEVEN S. 252 ff.; PANZER Abb. 7; STRZYGOWSKI S. 351 u. Abb. 297; LOOMIS S. 140 u. Taf. 1/B; HERZFELD S. 131; A. Goldschmidt u. K. Weitzmann, Die byzantinischen Elfenbeinskulpturen des 10. bis 13. Jhs., Berlin 1930 u. 1934, S. 66 f. u. Abb. 125-d; BRÉHIER Taf. XXXIX; STAMMLER Sp. 337; BERTELLI S. 246; D. T. Rice, Byzantinische Kunst, München 1964, Abb. 407; SETTIS-FRUGONI S. 183 ff. u. Fig. 54.

J. R. Kirk, *The Alfred and Minister Lovel Jewels*, Oxford 1948; RICE S. 214 ff. u. Taf. XV/a; SETTIS-FRUGONI S. 174 (Anm. 86).

15

Oxford, Ashmolean Museum.

Vorderseite des sog. Alfred-Juwels. Ende des 9. Jhs.

Äßerst vereinfachte Darstellung der Luftfahrt Alexanders.

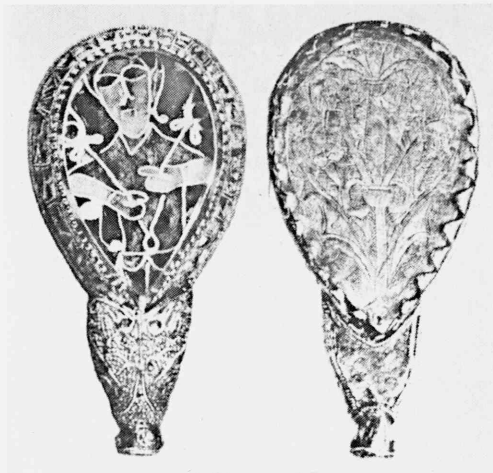
c) Emailarbeiten

16

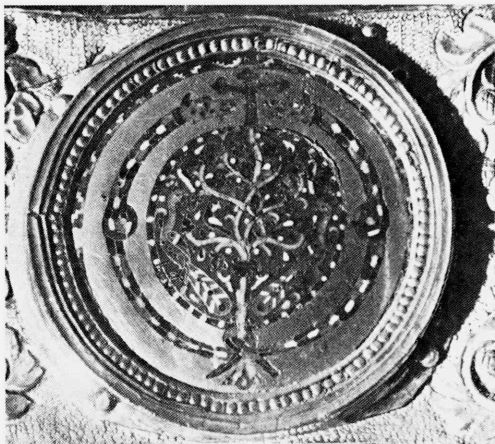
Venedig, San Marco.

Zwei Email-Medaillons auf der unteren Bordüre der Pala d'Oro. Byzantinisch, 11. Jh.

Die abgekürzt dargestellte Luftfahrt auf einem der beiden Medaillons ist auf dem anderen von der Darstellung der Erde vervollständigt, die als eine von Ozean in der Form der zwei Schlangen umgebene Scheibe wiedergegeben ist, wie sie Alexander von der Himmelshöhe sah.



SUPKA S. 314 u. Abb. 4; GRABAR S. 240 f. u. Taf. I/a; RICE S. 215 u. Taf. XV/c; W.F. Volbach etc., La Pala d'Oro, Florenz 1965, S. 65 f. u. Taf. LVII; J. de Luigi-Pomorisač, Les émaux byzantins de la pala d'oro de l'église de Saint-Marc à Venise, 2 Bde., Zürich 1966, S. 59 f. u. Nr. 118, 120; K. Wessel, Die byzantinische Emailkunst vom 5. bis 13. Jahrhundert, Recklinghausen 1967, Abb. 46x; SETTIS-FRUGONI S. 186 ff. u. Fig. 56—57.



17

Kiev, Archäologisches Museum (früher Sammlung B. Khanenko).

Mittelstück (Email) eines Golddiadems, das in der Gegend von Kiev gefunden wurde. 11.—12. Jh.

Alexander ist als byzantinischer Kaiser dargestellt.



PANZER S. 8 u. Abb. 10; Collection Khanenko, Croix et Images, 1899—1900, Époque slave, 1909, Taf. XXVII; Istorija Kultury Drevnej Rusi, II, Moskau—Leningrad 1951, Fig. 204; GRABAR S. 248 f. u. Fig. 3; SETTIS-FRUGONI S. 174 u. Fig. 48.

18

Innsbruck, Tiroler Landesmuseum.

Mittelbild der Ortokidenschlüssel des Rukn ed daula Daud (bis 1144 Emir von Amida). Vor 1144, im Orient, wahrscheinlich unter byzantinischem Einfluß entstanden. Arabische und persische Inschriften.

O. v. Falke, Kupferschmelze im Orient und Byzanz, in: Monatshefte für Kunstwissenschaft, 1909, S. 234 f.; STRZYGOWSKI S. 353 u. Taf. XXI/1; SUPKA S. 307 ff.; LOOMIS S. 140 u. Taf. 1/E; HERZFELD S. 132; G. Migeon, Manuel d'art musulman, Paris 1927, II, 21; STAMMLER Sp. 336 u. Abb. 1; FRANCOVICH f. II (S. 164); RICE S. 214 u. Taf. XV/b; BERTELLI S. 245; SETTIS-FRUGONI S. 174 f. u. Fig. 49.



d) Metallarbeiten

19

Leningrad, Ermitage.

Vorderseite des Bleisiegels. Byzantinisch, 10. Jh. (911 oder 912).

Der zweirädrige Wagen Alexanders ist mit zwei Greifen gespannt. Der König hält in beiden Händen einen undeutlichen Gegenstand.

A. Bank, 'Une bulle de plomb avec l'image de l'Ascension d'Alexandre le Grand' (auf Russisch), Hermitage Museum, Oriental Department, Travaux, iii, Leningrad 1940; RICE S. 215; GRABAR S. 248 f. u. Taf. IV; SETTIS-FRUGONI S. 192 u. Fig. 61.



20

Lenigrad, Ermitage.

Große Silvervase aus Transkaukasien. Treibarbeit, die im 12.—13. Jh. in der an Byzanz angrenzenden Region entstanden ist.

A. Grabar, Les succès des arts orientaux à la cour byzantine sous les Macédoniens, in: Münchner Jahrbuch der bildenden Kunst, 2, 1951, S. 46; RICE S. 215; GRABAR S. 247 f. u. Taf. III/b; A. Grabar,



L'Art profane en Russie pré-mongole et le «Dit d'Igor», in: L'Art de la fin de l'antiquité et du Moyen Âge, I, Paris 1968, S. 333; SETTIS-FRUGONI S. 178 u. Fig. 50a.

21

Washington, Dumbarton-Oaks Collection.

Goldring, Byzantinisch, 11. Jh.

M. C. Ross, Catalogue of the Byzantine and Early Medieval Antiquities in the Dumbarton Oaks Collection, vol. II: Jewelry, Enamels and Art of the Migration Period, Washington 1965, S. 87 f. u. Taf. LXII; SETTIS-FRUGONI S. 195 f. u. Fig. 63.



22

Athen, Nationalmuseum, Sammlung H. Stathatos.

Ring, Byzantinisch, 12. Jh.

RICE S. 215; É. Coche de la Ferté, Sur quelques bagues de la collection Stathatos, in: Comptes rendu de l'Académie des inscript. et Belles Lettres, 1956, S. 72; É. Coche de la Ferté, Les Objets byzantins et post-byzantins, (Collection Hélène Stathatos, II), Straßburg 1957, S. 34 ff. u. Fig. 20; SETTIS-FRUGONI, S. 196 u. Fig. 64.



23

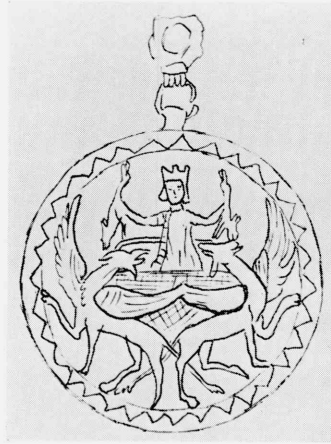
Rom, Sammlung Giuseppe Cellini.

Ring. Byzantinisch, 13. Jh. (?)

SETTIS-FRUGONI S. 201 u. Fig. 69.



A. S. Uvarov, Sbornik Melkih Trudov, I, Moskau 1910, S. 311 u. Fig. 86; SETTIS-FRUGONI S. 194 u. Fig. 62.



24

Zaraj (Rußland), Kloster.

Amulett ("Panaghia"), 14. Jh.

II. Westliche Kirchengeschmückung (Plastik und Mosaiken)

a) Italien

25

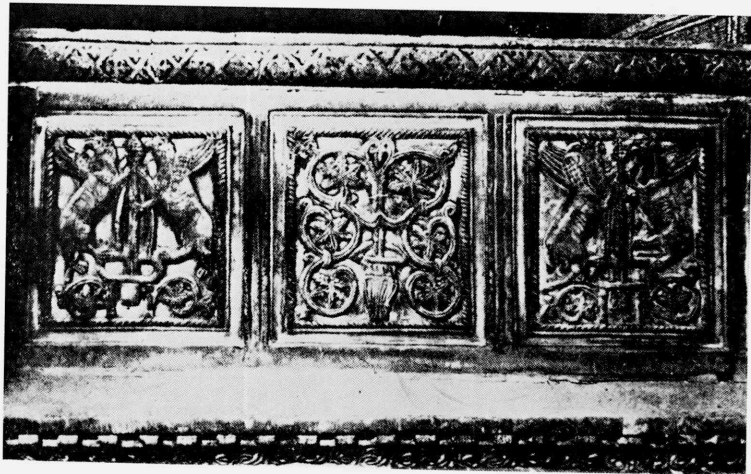
Venedig, San Marco, oberer Umgang.

Venezianisch, Ende des 11. Jhs. Eine der

Parapetplatten des oberen Umganges (Nr. 36).

In den beiden äußeren Abschnitten des dreigliedrigen Reliefs schwingt die Reminiszenz an die Luftfahrt Alexanders im Greifenwagen mit.

O. Demus, Eine Reliefplatte in San Marco, in: *XAPIΣTHPION EIS A. K. OPAAHΔON*, II, Athen 1964, 57 f.

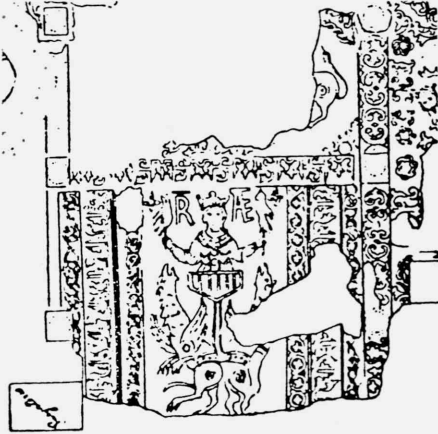


25

Taranto (Apulien), Dom, Mittelschiff.

Mosaikfußboden (zerstört), 1160.

BERTAUX S. 492; G. Antonucci, Il mosaico pavimentale del duomo di Taranto e le tradizioni musive calabrosicule, in: Archivio Storico per la Calabria e la Lucania, XII, 1942, S. 121 ff. u. Fig. auf S. 133; GRABAR S. 242 u. Fig. 1; C. Settis-Frugoni, Per una lettura del mosaico pavimentale della cattedrale di Otranto, in: Bulletin dell'Istituto Storico Italiano per il Medio Evo e Archivio Muratoriano, LXXX, 1968, Fig. 10; SETTIS-FRUGONI S. 294 f. u. Fig. 103.



Evo e Archivio Muratoriano, LXXX, 1968, S. 213 ff., u. LXXXII, 1972, S. 243 ff.; SETTIS-FRUGONI S. 285 f. u. Fig. 97.



28

Trani, Dom.

Mosaikfußboden des 12. Jhs. (von Pantaleo gelegt?).

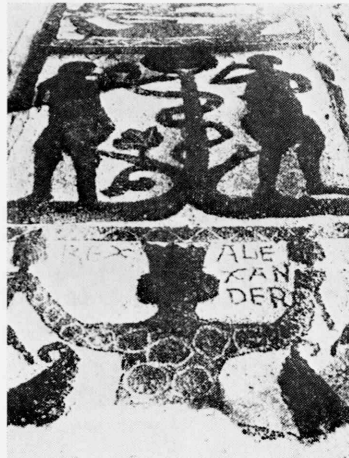
27

Otranto (Apulien), Dom.

Mosaikfußboden, 1163—1165 von "presbyter Pantaleo" gelegt. Beischrift: *ALEXANDER REX*.

Die Luftfahrt Alexanders gehört in diesem Mosaikfußboden zu den Szenen, die Laster symbolisieren. Zwei adossierte Greifen tragen auf ihren Kruppen einen Thronessel, auf dem Alexander sitzt.

H. W. Schulz, Denkmäler der Kunst des Mittelalters im Unteritalien, I, Dresden 1860, S. 265; BERTAUX S. 488 f. u. Fig. 214; C. A. Garufi, Il pavimento a mosaico della cattedrale d'Otranto, in: Studi Medievali, 1906/7, II, S. 505 ff. u. Taf. IV; LOMIS S. 184 u. Taf. I/H; HERZFELD S. 130; FRANCOVICH f. LXXXII (S. 351); MÂLE S. 271; L'ORANGE Fig. 54; RICE S. 216; CARY Taf. I; GRABAR S. 242 f. u. Taf. I/b; HOLL Sp. 95 (mit Abb.); C. Settis-Frugoni, Per una lettura del mosaico pavimentale della cattedrale di Otranto, in: Bulletin dell'Istituto Storico Italiano per il Medio





29

Alexanders Luftfahrt ist als Symbol der Superbia neben dem Sündenfall dargestellt.

C. Settis-Frugoni, *Per una lettura del mosaico pavimentale della cattedrale di Otranto*, in: *Buletino dell'Istituto Storico Italiano per il Medio Evo*, LXXX, 1968, S. 229; SETTIS-FRUGONI S. 289 u. Fig. 99.

29

Matrice (Campobasso, Süditalien), S. Maria della Strada.

Lünette des Südportals, 12. Jh.

Die Szene der Luftfahrt Alexanders ist vom Text des Mathäusevangeliums (7, 21) und von der oberhalb der Alexander-Szene befindlichen Agnus-Dei-Darstellung begleitet, was darauf hinweist, daß die Luftfahrt nicht im negativen Zusammenhang dargestellt ist. Die Alexander-Szene illustriert nämlich die Möglichkeit eines Menschen, in den Himmel zu kommen, der durch das Lamm Gottes symbolisiert ist.

E. Jamison, *Notes on S. Maria della Strada at Matrice, its History and Sculpture*, in: *Papers of the British School at Rome*, XIV, 1938, S. 32 ff.; SETTIS-FRUGONI S. 296 u. Fig. 105; LANGEDIJK S. 285.

30

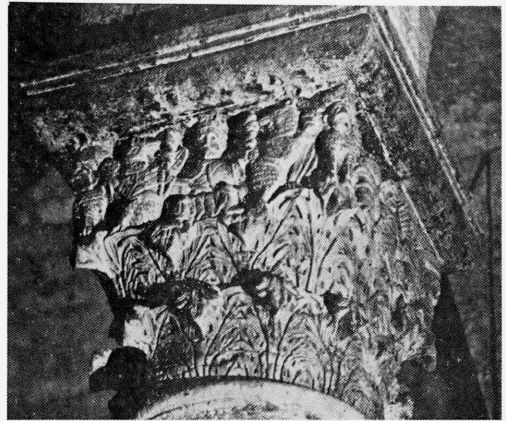
Bitonto (Apulien), Dom.

Kapitell des frühen 13. Jhs.

Auf dem zweiten Kapitell des Mittelschiffes (linke Seite) ist die Luftfahrt Alexanders

zusammen mit seiner Rückkehr dargestellt.

H.v.d. Gabelentz, *Mittelalterliche Plastik in Venedig*, Leipzig 1930, S. 127; BERTAUX S. 653 u. Fig. 302; GRABAR S. 242; SETTIS-FRUGONI S. 289 ff. u. Fig. 100—102.



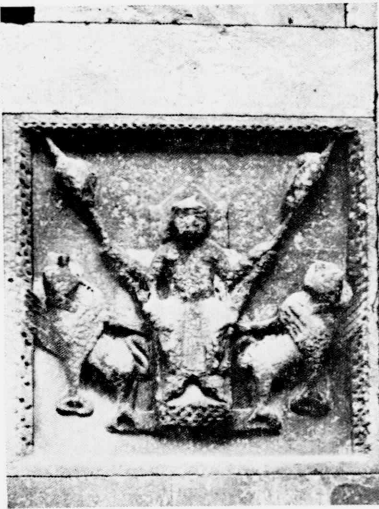
31

Fidenza (ex Borgo San Donnino), Dom, Fassade.

Reliefplatte, um 1180.

G. Zimmermann, *Oberitalienische Plastik*, Leipzig 1897, Abb. 48; A. Venturi, *Storia dell'Arte Italiana*, III, Mailand 1904, S. 328, 769 u. II, S. 528; PANZER S. 9; A. K. Porter, *Lombard Architecture*, IV, Yale 1917, Taf. XXIX, Fig. 3, u. II, S. 191; LOOMIS S. 185 u. Taf. II/N; H. v. d. Gabelentz, *Mittelalterliche Plastik in Venedig*, Leipzig 1930, S. 127 f. ; FRANCO-

VICH S. 340 u. Fig. 404; MAÏE S. 272 u. Fig. 177;
SETTIS-FRUGONI S. 312 f. u. Fig. 108.



32

Narni, San Domenico (ex Santa Maria Maggiore), Fassade.

Ende des 12. Jhs.

J. R. Rahn, *Geschichte der bildenden Künste in der Schweiz*, S. 218, Amm. 3; G. Dimitrokalis, *L'Ascensione di Alexandro Magno nell'Italia del Medioevo*, in: *Thesaurismata*, 4, 1967, S. 214 ff. u. Fig. 7; SETTIS-FRUGONI S. 297 f. u. Fig. 104.



b) Deutschland

33

Basel, Münster, Chorumgang.

Kapitell, zweite Hälfte des 12. Jhs.

Alexander als Symbol der Superbia ist dem Sündenfall und der Vertreibung aus dem Paradies gegenübergestellt.

CAHIER Abb. B u. S. 165 f.; PANZER Abb. 11; LOMIS S. 178, 184 u. Fig. 2; HAMANN S. 51; J. Gantner, *Kunstgeschichte der Schweiz*, I, Frauenfeld 1936, S. 235 u. Fig. 178; W. Deonna, *Chapiteaux de la cathédrale Saint-Pierre à Genève*, in: *Genava*, XXV, 1947, S. 56; SETTIS-FRUGONI S. 319 ff. u. Fig. 110.



34

Freiburg i. Br., Münster.

Säulenkapitell am Eingang zur ehem. Nikolauskapelle. Anfang des 13. Jhs.

Alexander sitzt in einem kahnartigen Korb, an den zwei Greifen gespannt sind.

F.X. Kraus, in: *Christliche Kunst*, II, I, S. 402; CAHIER Abb. K; Moller, *Denkmäler deutscher Baukunst*, II, Taf. XIX; GOLDSCHMIDT S. 71; PANZER Abb. 2 u. 3; HAMANN S. 51 f. u. Abb. 1; LOMIS S. 178; POPPEN S. 163; HÜBNER Abb. 7; STAMMLER Abb. 6; Ch. Settis-Frugoni, *An 'Ascent of Alexander'*, in: *Journal of the Warburg and Courtauld Institutes*, 33, 1970, S. 307 f. ; SETTIS-FRUGONI S. 321 u. Fig. 112.



34

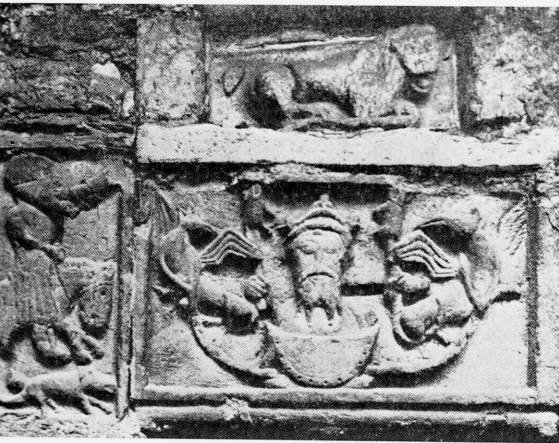
35

Remagen (Rheinland), Portal neben der Pfarrkirche.

Reliefplatte, spätes 12. Jh.

Das Relief stellt den König als Büste in einem mondsichelartigen Gefäße dar, mit Spanferkeln an den beiden Handspießen.

W. Braun, *Kunstarchäologische Betrachtungen über das Portal zu Remagen*, Fest-Programm zu Winkelmann's Geburtstage am 9. December 1859..., Bonn 1859, S. 1 ff.; CAHIER Abb. auf S. 174; GOLDSCHMIDT S. 81 ff.; S. Beissel, *Die Skulpturen des Portals zu Remagen*, in: *Zeitschrift für Christliche Kunst*, IX, Sp. 151 ff.; SCHNÜTGEN S. 180; G. Sanoner, *Analyse des Sculptures de Remagen*, in: *Revue de l'art chrétien*,



XIV, 1903, S. 445 ff.; PANZER S. 9 u. Abb. 4; HAMANN S. 55 f. u. Abb. 4—5; LOOMIS S. 177 u. Fig. 1; STAMMLER Abb. 5.; Aus'm Werth, *Denkmäler des christlichen Mittelalters in den Rheinlanden*, Taf. LII/8; G. De Francovich, *La corrente comasca nella scultura romanica europea*, in: *Riv. dell'Istit. di Archeol.*, VI, 1937—8, S. 105 ff., Fig. 61—62; SETISS-FRUGONI S. 318 f. u. Fig. 109.

c) Frankreich

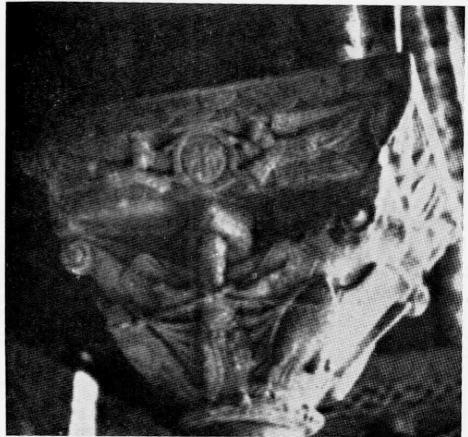
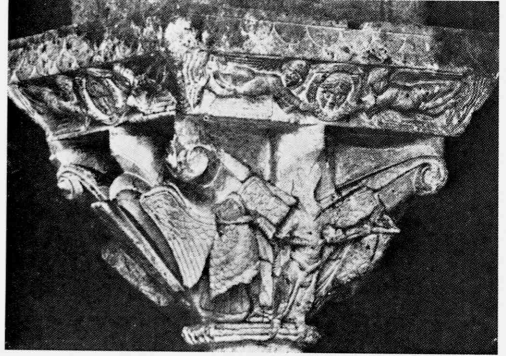
36

Moissac, Kathedrale, Kreuzgang, Westtrakt.

Kapitell (Nr. 75), 12. Jh.

An demselben Kapitell ist die Luftfahrt Alexanders zweimal dargestellt. Der König ist zwischen zwei Adlern placiert.

K. Porter, *Romanesque Sculpture of the Pilgrimage Roads*, IV, Boston 1923, Abb. 282; SETISS-FRUGONI S. 271 u. Fig. 85—87.



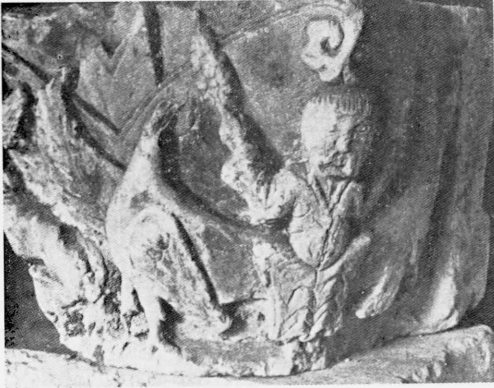
37

Thouars, Musée Barré.

Kapitell des 12. Jhs., das wahrscheinlich aus der Kirche St. Pierre du Châtelet stammt.

Alexander ist zwischen den Adlern dargestellt.

SETTIS-FRUGONI S. 274 ff. u. Fig. 88.



38

Chalon-sur-Saône, Cathédrale Saint Vincent.

Kapitell des 12. Jhs.

CAHIER S. 172 f.; Chr. Malo, De l'ancien diocèse de Chalon, in: Bull. Monum., XL, 1931, S. 371 ff. u. Fig. auf S. 425; O. Beigbeder, Ce que l'art roman doit à Pythagore, in: Connaissance des Arts, CXV, 1961, septembre, S. 80 ff.; SETTIS-FRUGONI S. 276 ff. u. Fig. 89.

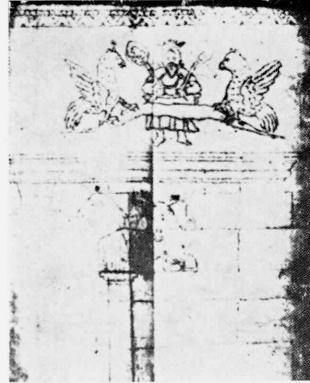


39

Nîmes (Provence), Notre-Dame, Portal.

Zerstörtes Relief des 12. Jhs.: Teilstück eines Frieses (über dem Portal der Kathedrale). Eine alte Zeichnung (von Rulmann, um 1625) nach dem Fries ist in Paris, Bibl. Nat., franç. 8648, erhalten.

STAMMLER S. 339 u. Abb. 4; R. Hamman, Das Tier in der romanischen Plastik Frankreichs, in: Mediaeval Studies in Memory of A. Kingsley Porter, Cambridge 1939, II, S. 434 ff. u. Fig. 18; FRANCOVICH f. LXXXIII (S. 354); SETTIS-FRUGONI S. 278 f. n. Fig. 90.



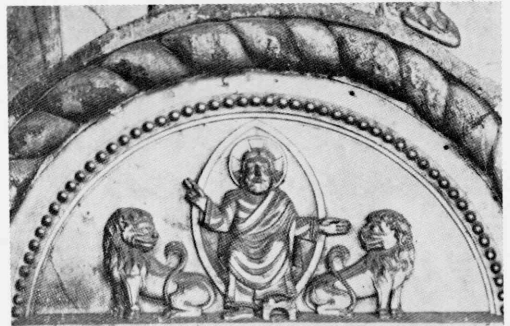
40

Oloron-Ste.-Marie (Basses-Pyrénées), Ste.-Marie.

Tympanum des Westportals. Rekonstruiertes Relief.

Die Greifenfahrt bildet das Gegenstück zu Daniel in der Löwengrube.

K. Porter, Romanesque Sculpture of the Pilgrimage Roads, IV, Boston 1923, Abb. 461; STAMMLER Sp. 338 f.; SETTIS-FRUGONI S. 279 f. u. Fig. 91.



d) England

41

Charney Basset (Berkshire), Kirche.

Tympanum des 12. Jhs.

C.E. Keyer, *Norman Tympana*, S. 70; LOOMIS S. 178; SETTIS-FRUGONI S. 82 u. Fig. 28.



42

Bury St. Edmond (Suffolk), Abtei.

Kapitell des 12. Jhs.

G. Zarnecki, *Romanesque Objects at Bury St. Edmonds*, in: *Apollo*, LXXXV, 1967, S. 407 ff. u. Fig. 13; SETTIS-FRUGONI S. 287 (Anm. 43) u. Fig. 98.



43

Wells (Somerset), Kathedrale.

Miserikordie, um 1330—1340.

Der Schaft der Lanze ist gebrochen.

BOND S. 226 f.; LOOMIS S. 178 u. Taf. III/R; *Archaeologia*, LV, 340; *English Medieval Art* (Ausstellungskatalog), London 1930 (Victoria and Albert Museum), Nr. 109, Taf. 21; Ch. Grössinger, *English Misericords of the thirteenth and fourteenth Centuries*

and their relationship to manuscript illuminations, in: *Journal of the Warburg and Courtauld Institutes*, 39 1975, Taf. 17/c; REMMANT S. 138; SETTIS-FRUGONI S. 321 f. u. Fig. 113.

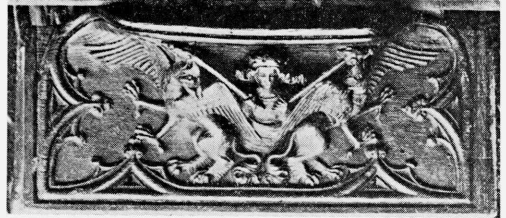


44

Gloucester (Gloucestershire), Kathedrale.

Miserikordie (Nr. 8), Mitte des 14. Jhs.

BOND S. 80; MEISSNER S. 184; PANZER S. 9; LOOMIS S. 178 u. Taf. III/W; REMNANT S. 49; SETTIS-FRUGONI S. 324 u. Fig. 114.



45

Gloucester, Kathedrale.

Miserikordie (Nr. 22), Mitte des 14. Jhs.

BOND S. 80; MEISSNER S. 184; PANZER S. 9; LOOMIS S. 178 u. Taf. III/Y; REMNANT S. 50; SETTIS-FRUGONI S. 325 u. Fig. 115.

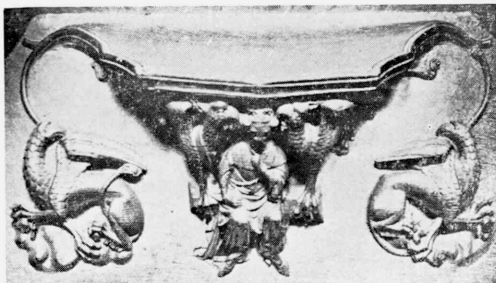


46

Chester (Cheshire), Kathedrale.

Miserikordie, um 1390.

BOND S. 79; LOOMIS S. 178 u. Taf. III/T; REMNANT S. 24; SETTIS-FRUGONI S. 326 u. Fig. 117.

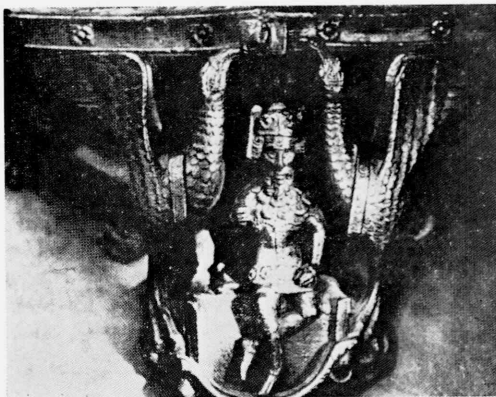


47

Lincoln (Lincolnshire), Kathedrale.

Miserikordie, Ende des 14. Jh.

BOND S. 78; LOOMIS S. 178 u. Taf. III/U; REMNANT S. 91 f.; SETTIS-FRUGONI S. 326 u. 116.

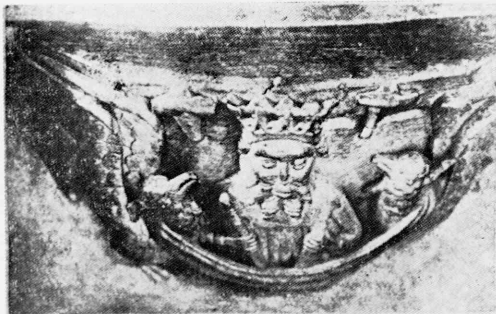


48

Whalley (Lancashire), St. Mary's Church.

Miserikordie, Anfang des 15. Jhs.

LOOMIS S. 178 u. Taf. II/J; REMNANT S. 84, 87; SETTIS-FRUGONI S. 326 u. Fig. 118.

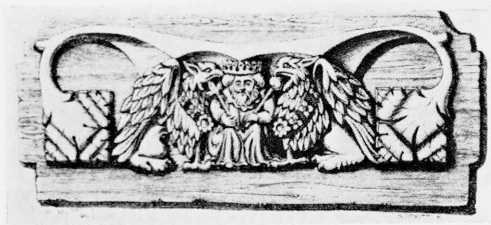


49

Darlington (Durham), St. Curthbert's Church.

Miserikordie, erste Hälfte des 15. Jhs.

LOOMIS S. 178 u. Taf. II/Q; REMNANT S. 40. u. Taf. 21a; SETTIS-FRUGONI S. 328. u. Fig. 119.

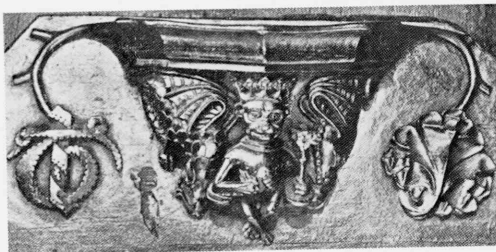


50

Cartmel (Lancashire), Priory Church.

Miserikordie, um 1440.

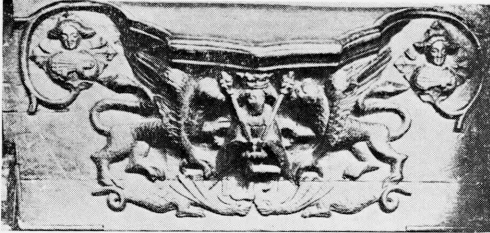
MEISSNER S. 185; PANZER S. 9; LOOMIS S. 178, 184, u. Taf. II/P; REMNANT S. 77 f.; SETTIS-FRUGONI S. 330 u. Fig. 121.



Beverly (Yorkshire), S. Mary's Church.

Miserikordie, um 1445.

LOOMIS S. 178 u. Taf. III/S; REMNANT S. 177 f.;
SETTIS-FRUGONI S. 328 u. Fig. 119.



III. Westliche Handschriften- illustrationen

a) *Historia de Preliis*

52

Paris, Bibliothèque Nationale, Cod. lat. 8501,
fol. 48v.

Illustration der *Historia de Preliis I*¹. Süd-
italienisch, frühes 14. Jh.

DURAND S. 153; GRAEVEN S. 273; ROSS 1963 S. 51;
SETTIS-FRUGONI S. 236 u. Fig. 79.



Leipzig, Universitätsbibliothek (früher Stadt-
bibliothek), Repositorium II 4^{to} 143 (Cod.
417), fol. 101r.

Illustration der *Historia de Preliis I*². Süd-
italienisch, spätes 13. Jh.

Alexander sitzt auf seinem Thron, der in ein
halbrundes, korbartiges Geflecht gestellt sind.

R. Bruck, Die Malereien in den Handschriften des
Königreichs Sachsen, Dresden 1906, S. 176; CARY
S. 256 u. Taf. VIII; ROSS 1963 S. 53; K. Secomska,
The Miniature Cycle in the Sandomierz Pantheon and
the Medieval Iconography of Alexander's Indian
Campaign, in: Journal of the Warburg and Courtauld
Institutes, 38, 1975, S. 60; SETTIS-FRUGONI S. 232
(Anm. 77) u. Fig. 77.



b) Der altfranzösische Prosa- Alexanderroman (Ableitung von der *Historia de Preliis* *I*²)

54

London, British Museum, Cod. Roy. 19 D I
fol. 37r.

Illustration der Sammelhandschrift, die den
altfranzösischen Prosa-Alexanderroman (Re-
daktion I) enthält. Französisch, Mitte des 14.
Jhs.

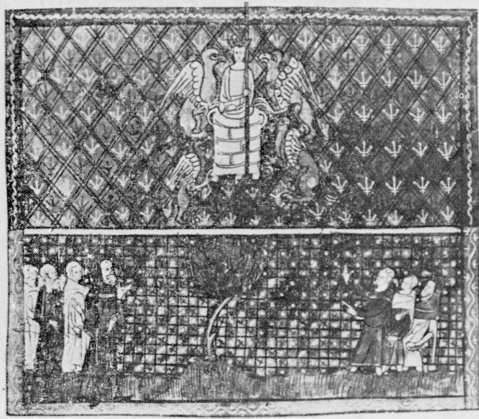
Text:

*Et quant la cage fut faite, il fist prendre .xvi.
oisiaus grifs & les fist lier par les cuisses o
bonnes chaennes de fers. Les queles il fist
atachier a la cage & mist aueuques soi char
pour donner aux oisiaus & esponges plaines*

*d'yaue. Quant il fu dedens la cage si auoit
une piece de char liee a une lance & la bouta
hors par le pertuis.*

Die im Text erwähnte Zahl der Greifen ist sechzehn, in der Illustration sind nur vier davon dargestellt.

WARD S.143; DODGSON S.396 u. Taf. I; WARNER/
GILSON S. 339 ff.; J. J. A. Ross, *Methods of book
production in a fourteenth century French miscellany*,
in: *Scriptorium*, 6, 1952, S. 63 ff.; ROSS 1963, S. 55;
SETTIS-FRUGONI S. 232 (Anm. 78) u. Fig. 78.



55

London, British Museum, Cod. Roy. 20 A V,
fol. 20v.

Illustration des altfranzösischen Prosa-Alex-
anderromans [Redaktion I] (*Le livre et la vray
hystoire du bon roy Alixander*). Wahrscheinlich
englisch, spätes 13. Jh. Für den Text siehe
Kat. Nr. 54.

Rubrik: *Comment li rois Alix se feist monter en
lair as oyseaux grif.*

WARD S.125; DODGSON S.396; WARNER/GILSON
S. 352; SETTIS-FRUGONI S. 212 (Anm. 20) u. Fig. 70.



56

Le Mans, Bibliothèque de la Ville, Cod. 103,
Illustration des altfranzösischen Prosa-Alex-
anderromans (Redaktion I). Italienisch, spätes
14. Jh.

Catalogue général des Bibliothèques publiques de
France, XX, S. 85 f.; ROSS S. 55; SETTIS-FRUGONI
S. 232 (Anm. 77).

57

Paris, Bibliothèque Nationale, Cod. fr. 1385,
fol. 63v.

Unvollendte Illustration des altfranzösischen
Prosa-Alexanderromans (Redaktion I). Ita-
lienisch, 14. Jh.

ROSS 1963 S. 55.

58

London, British Museum, Cod. Roy. 15 E VI,
fol. 20v.

Illustration des altfranzösischen Prosa-Alex-
anderromans (Redaktion I). Französisch, nach
1445. Für den Text siehe Kat. Nr. 54.

WARD S. 129; DODGSON S. 396 u. Taf. I; WARNER/
GILSON S. 177 ff.; ROSS 1963 S. 55.



59

London, British Museum, Cod. Roy. 20 B XX, fol. 76v.

Illustration des altfranzösischen Prosa-Alexanderromans (*Le livre et la vraye hystoire du bon roy Alixandre*). Französisch, Mitte des 15. Jh.

WARD S.128; DODGSON S.396; WARNER/GILSON S.369 f. u. Taf. 116; ROSS 1963 S. 55.

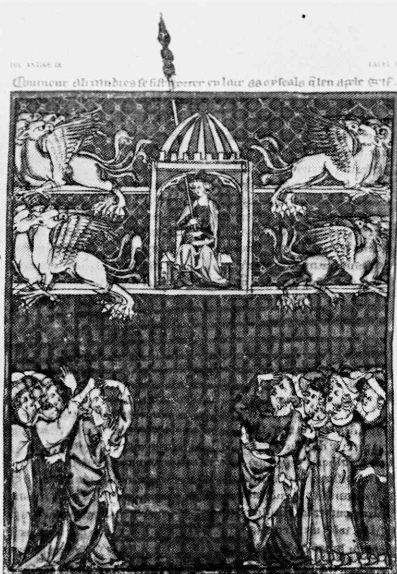
60

Berlin, Kupferstichkabinett, Cod. 78. C. 1.

Illustration des altfranzösischen Prosa-Alexanderromans (Redaktion II). Franco-flämisch, spätes 13. Jh.

Dem Text gemäß ist die Zahl der Greifen in der Miniatur sechzehn.

L. Olschki, *Romanische Literatur des Mittelalters*, S. 81 ff.; P. Wescher, *Beschreibendes Verzeichnis der Miniaturen, Handschriften und Einzelblätter des Kupferstichkabinetts der Staatlichen Museen zu Berlin*, Leipzig 1931, S. 36 ff.; L. Olschki, *Manuscrits français à peintures des bibliothèques d'Allemagne*, Genf 1932, S. 37 f.; HÜBNER Taf. 3; STAMMLER Sp. 341 f.; F. Anzelewsky, *Miniaturen aus deutschen Handschriften*, Baden-Baden 1961, Taf. 5 u. S. 19 f.; ROSS 1963 S. 56.



58

60

61

London, British Museum, Cod. Harley 4979, fol. 70v.

Illustration des altfranzösischen Prosa-Alexanderromans (Redaktion II). Franco-flämisch, spätes 13. Jh.

WARD S. 127 f.; GODGSON S. 396; ROSS 1963, S. 56.

62

Brüssel, Bibliothèque Royal de Belgique, Cod. 11040, fol. 69v.

Illustration des altfranzösischen Prosa-Alexanderromans [Redaktion II] (*La vraie ystoire dou bon roi Alexandre*). Franco-flämisch, spätes 13. Jh.

MILLET S. 123; C. Gaspar und F. Lyna, *Les principaux manuscrits à peintures de la Bibliothèque Royal de Belgique*, I, Paris 1937, S. 228 ff. u. Taf. XLVII; ROSS 1963 S. 56.

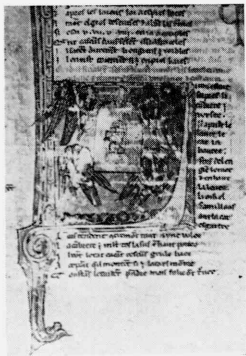


c) *Roman d'Alexandre* (Version von Alexandre de Paris) und *Histoire du Bon Roy Alixandre* von Jehan Wauquelin (Prosa-Version des *Roman d'Alexandre*)

63

Paris, Bibliothèque Nationale, Cod. fr. 786, fol. 60v.

Illustration des *Roman d'Alexandre*. Mitte des



13. Jhs. Für den Text siehe H. Michelant, *Li romans d'Alexandre par Lambert li Tors et Alexandre de Bernay*, Stuttgart 1846, S. 385 ff. Rubrik: *Ci dist com Alixandres se fist haucer à mont vers le ciel en une corbille et tenoit en sa main une lance et car entor.*

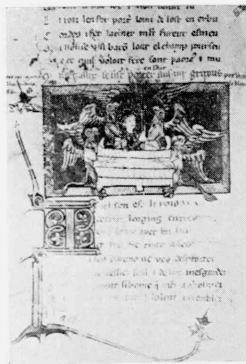
MILLET S. 130 u. Taf. XXV; ROSS 1963 S. 12; SETTIS-FRUGONI S. 222 u. Fig. 71.

64

Paris, Bibliothèque Nationale, Cod. fr. 790, fol. 81v.

Illustration des *Roman d'Alexandre*. Mitte des 14. Jhs.

MILLET S. 130 u. Taf. XXV; ROSS 1963 S. 12; SETTIS-FRUGONI S. 223 u. Fig. 72.



65

Paris, Bibliothèque Nationale, Cod. fr. 791, fol. 68v.

Illustration des *Roman d'Alexandre*. Spätes 14. Jh.

MILLET S. 130 u. Taf. XXV; ROSS 1963 S. 12.

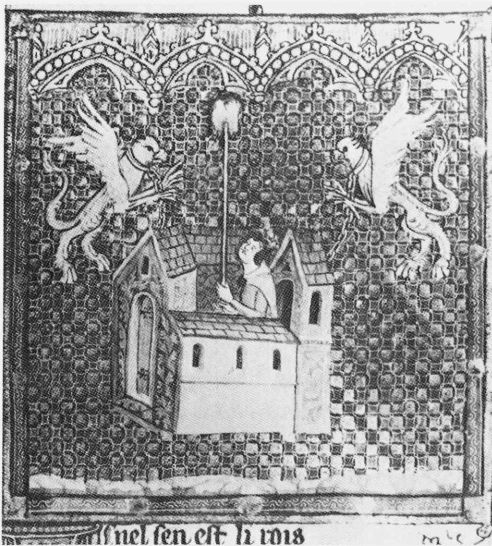


Oxford, Bodleian Library, Cod. Bod. 264, fol. 81r.

Illustration des *Roman d'Alexandre*. Flämisch (Jehan de Grise), um 1338—44.

Rubrik: *Comment Alixandre fuit porté en l'eire meruellesment par la vertu de ii greffons et par char cru contrevys par soun engyne.*

M. R. James, *The Romance of Alexander*, Oxford 1933; ROSS 1963 S. 12; O. Pächt und J. J. G. Alexander, *Illuminated Manuscripts in the Bodleian Library Oxford, I*, Oxford 1966, S. 22, Nr. 297; K. Se-comska, *The Miniature Cycle in the Sandomierz Pantheon and the Medieval Iconography of Alexander's Indian Campaign*, in: *Journal of the Warburg and Courtauld Institutes*, 38, 1975, S. 60; SETTIS-FRUGONI S. 223 u. Fig. 74.



Paris, Bibliothèque Nationale, Cod. fr. 9342, fol. 180v.

Illustration der *Histoire du Bon Roy Alixandre* von Jehan Wauquelin. Um 1460.

Text:

...Il fist venir des carpentiers et leur fist faire une cage grande par raison ensi que pour ly mettre dedens et pour soy bien aise conduire dedens. Quant la cage fu faite, il fist prendre. .VIII. griffons, dont il avoit assez en son ost, car en son ost il avoit de toutes choses est-

ranges qu'il avoient trouvet en inde aulcune partie. Et fist ches griffons tres bien loyer de chaines de fer a cette cage a chascun coste. .II. Quant ce fu fait il commanda aux barons de son ost que la ilz que la ilz le attendissent tanz qu'ilz orroient aulcune nouvelle de ly. Adont il entra dans la ditte cage et prist avec li sponges plaines d'iauwe. Tantost qu'il fu ens, il prist une lance et mist une pieche de char au bebout de la lanche si le bouta hors de la cage par le deseure contre mont. Adont ces griffons qui faim avoient se commencherent a eslever en air pour aler aprez la viante et en eslevant ilz emportoient la cage avec eulx, et plus montoient et plus montoit la cage et la viande et toudis en aloient. Finablement tant monterent que les barons de l'ost perdirent la veuve de leur maistre, de la cage et des oiseaux et ossi fist Alixandre d'eulx....Et comme il fuist si très hault que ia il sentist la chaleur du feu, il getta sa veuve par desoubz. Si nous temoigne l'istore qu'il estoit si tres hault qu'il li sambloit de la terre que ce ne fuist qu'ung bien petiot gardin enclos d'une petite soif, et de la mer qui aloit al environ de la terre ce ly sambloit une petite. coleuvre....

MILLET S. 125 ff. u. Taf. XXIV; ROSS 1963 S. 17.



Paris, Petit Palais, Coll. Dutuit, Cod. 465.

Illustration der *Histoire du Bon Roy Alixandre* von Jehan Wauquelin. Mitte des 15. Jhs. Für den Text siehe Kat. Nr. 67.

MILLET S.125 u. Taf. XXIV; ROSS 1963 S. 17.



d) *Weltchronik* von Jansen
Enikel

69

Regensburg, Thurn und Taxissche Hofbibliothek, Cod. Perg. III. fol. 110r, col. 2.

Illustration (185×79mm) in dem Alexander-Abschnitt der *Weltchronik* von Jansen Enikel. Süddeutsch, spätes 14. Jh.

Text:

*dô ieglich grifâ fliegend wart,
dô wart niht lenger gespart,
er hiez einen sezzel schön
bringen und mit siner krôn
zuo dem sezzel zehant
zwô stark stang, die man vant
und an den sezzel guot
der künic dô vil wol gemuot
hie z binden mit starken isen.*

.....
*die grifen truoc man dar zehant,
daz was an dem morgen fruoc,
und bant die ouch den stangen zuo.
die grifen wârn hungervar,
des nam der künic wol war:
die stangen er gên himel raht,
dâ von daz âs allez blaht.
dô fuorten in die grifen schön
gên dem himelischen trôn.*

.....
*dô kom zuo im ein stimme,
diu sprach zuo im mit grimme:
'Alexander, wâ wil dû hin?
dû hâst nindert rehten sin.
wil dû wider die gotheit
streben, daz wirt dir leit,
dû wirst liden arbeit*

und immer werndez herzenleit. etc.'

.....
*er sprach: 'ich sich niur einen huot
sweben in dem wazzer rich.'
diu stimm sprach: 'dâst daz ertrich,
daz dû dort sihest sweben,
in dem wazzer an heben. ...'*

Alexander sitzt, dem Text entsprechend, auf einem Sessel, an den die Stangen mit der Lockspeise befestigt sind; tief unter ihm ist die Erde "wie ein Hut" auf dem Meer schwimmend.

PANZER S. 9 u. Abb. 15; POPPEN S. 166; ROSS 1963 S. 39; ROSS 1971 S. 84 u. Fig. 86.

70

München, Bayerische Staatsbibliothek, Cod. c.g.m. 5, fol. 180v. col. 2.

Illustration in dem aus Janzen Enikel's *Weltchronik* entlehnten Alexander-Abschnitt der *Weltchronik*-Handschrift (gemischter Text von Rudolf von Ems *Weltchronik* mit Fortsetzungen aus der *Christherrechnung* und Enikel's *Weltchronik*). Süddeutsch, um 1380. Für den Text siehe Kat. Nr. 69.

PANZER S. 9 u. Abb. 14; E. Petzet, Die deutschen Pergamenthandschriften Nr. 1—200 der Staatsbibliothek in München, München 1920, S. 9 ff.; POPPEN S. 166; ROSS 1963 S. 40; ROSS 1971 S. 94 u. Fig. 122.

71

Wien, Österreichische Nationalbibliothek, Cod. 2921, fol. 195v, col. 2.

Illustration in dem Alexander-Abschnitt der 1397/98 datierten Handschrift von Jansen Enikel's *Weltchronik*. Für den Text siehe Kat. Nr. 69.

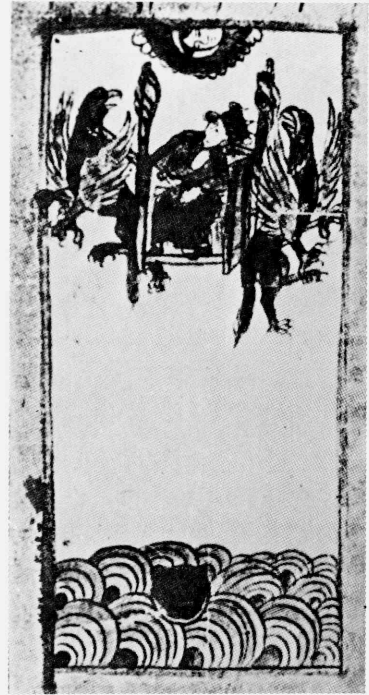
ROSS 1963 S. 40; ROSS 1971 S. 99 u. Fig. 141



69



70



71

72

Schloss Harburg, Oettingen-Wallerstein Bibliothek, Cod. I. 3, fol. II. deutsch, fol. 148r, col. 2.



Illustration (87×87mm) in dem aus Jansen Enikel's *Weltchronik* entlehnten Alexander-Abschnitt der Handschrift (Rudolf von Ems *Weltchronik* mit Fortsetzungen). Deutsch, zweite Hälfte des 14. Jhs. Für den Text siehe Kat. Nr. 69.

ROSS 1963 S. 40; ROSS 1971 S. 90 u. Fig. 103.

73

Stuttgart, Württembergische Landesbibliothek, Col. H. B. XIII, poet. germ. 6, fol. 254v, col. 2.

Illustration (110×85mm) in dem aus Jansen Enikel's *Weltchronik* entlehnten Alexander-Abschnitt der Handschrift (Rudolf von Ems *Weltchronik* mit Fortsetzungen). Deutsch, erste Hälfte des 14. Jhs. Für den Text siehe Kat. Nr. 69.

Rubrik: *Hie fur Allexander ut mit den greiften.*

ROSS 1963 S. 40; ROSS 1971 S. 87 u. Fig. 96.



74.

Kassel, Hessische Landesbibliothek, Cod. Theol. Fol. 4, fol. 264v, col. 1.

Illustration in dem aus Jansen Enikel's *Weltchronik* entlehnten Alexander-Abschnitt der 1384 datierten deutschen Handschrift (*Christherrechronik*, d.h. *Weltchronik* von Rudolf von Ems mit Forsetzungen), die entweder in Italien (Venedig oder Lombardei) oder von einem italienischen Maler in Deutschland illuminiert worden sein müßte. Für den Text siehe Kat. Nr. 69.

Alexander sitzt auf den Rücken der beiden Greifen. Die Erde, die himmlische Stimme und die beiden Lanzen mit der Lockspeise sind nicht dargestellt.

W. Hopf, Die Landesbibliothek Kassel, Marburg



1930, Teil 2 (von G. Struck), S. 102 ff.; ROSS 1963 S. 40; ROSS 1971 S. 93 u. Fig. 115.

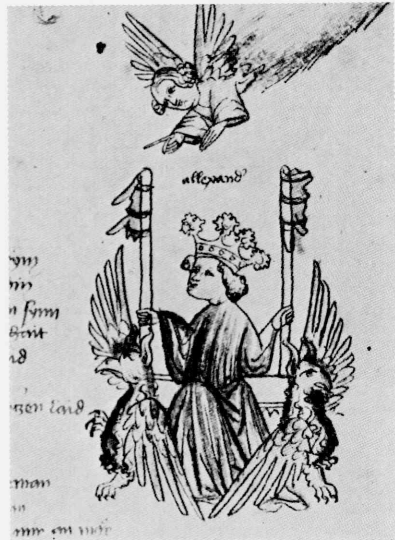
75

Heidelberg, Universitätsbibliothek, Cod. Pal. germ. 336, fol. 155r.

Illustration in dem Alexander-Abschnitt der *Weltchronik* von Jansen Enikel. Frühes 15. Jh. Für den Text siehe Kat. Nr. 69.

Die Erde ist unten als Inselstadt dargestellt, die vom Meer umgeben ist.

ROSS 1963 S. 40; ROSS 1971 S. 91 u. Fig. 110; SETTIFRUGONI Fig. 80.



München, Bayerische Staatsbibliothek, Cod. c.g.m. 250, fol. 184v.

Illustration in dem Alexander-Abschnitt der *Weltchronik* von Jansen Enikel. Süddeutsch, frühes 15. Jh. Für den Text siehe Kat. Nr. 69. Rubrik: *hie furnt die greiffen alexander.*

ROSS 1963 S. 40; ROSS 1971 S. 97 u. Fig. 131.



e) *Historienbibel*

77

Berlin, Staatsbibliothek Preussischer Kulturbesitz, Cod. Germ. Fol. 565, fol. 528r.

Illustration in dem Alexander-Abschnitt der *Historienbibel* (Rezension IA). Fränkisch, um 1460.

Text:

Und do die griffen ains halben jårs alt wurdent do hieß er im ain schönen sessel bringen. Daruff saß er mit siner kron. Und hieß zwo ysmi stangen mit ysen an den sessel binden und hieß an ain yeglich an daz ort binden flaisch. Und band die griffen an ain stang und fürtend ihn die griffen über sich gegen dem himelschen tron. Dô kam ain stimm zû im die sprach zornklich zû im: 'Alexander wa wit du hin?'

Rubrik: *furen (?) griffen in luft.*

Im Text sind zum Unterschied von der Il-

lustration zwei Stangen erwähnt.

H. Vollmer, *Ober- und Mitteldeutsche Historienbibeln*, I, Berlin 1912, Nr. 3; J.F.L.T. Merzdorf, *Die deutschen Historienbibeln des Mittelalters*, Tübingen 1870, S. 548 f.; ROSS 1963 S. 39; ROSS 1971 S. 110 u. Fig. 150; SETTIS-FRUGONI Fig. 81.



78

München, Bayerische Staatsbibliothek, Cod. c.g.m. 520, fol. 232r.



Illustration in dem Alexander-Abschnitt der 1465 geschriebenen deutschen Handschrift der *Historienbibel* (Rezension IA). Für den Text vgl. Kat. Nr. 77.

H. Vollmer, Ober- und Mitteldeutsche Historienbibeln, I, Berlin 1912, Nr. 13; J.F.L.T. Merzdorf, Die deutschen Historienbibeln des Mittelalters, Tübingen 1870, S. 36 ff.; ross 1963 S. 39; ross 1971 S. 113 f. u. Fig. 160.

79

New York, Pierpont-Morgan Library, Cod. 268, fol. 22r.

Illustration im Alexander-Abschnitte des schwäbischen *Bibel-Bilderbuches* um 1390—1400. Für den mit der *Historienbibel* (Rezension I) identischen Text vgl. Kat. Nr. 77.

S. De Ricci und W. J. Wilson, Census of Medieval and Renaissance Manuscripts in the United States and Canada, New York 1937, II, S. 1416; M. Harrsen, Central European Manuscripts in the Pierpont-Morgan Library, New York 1958, Nr. 40, S. 55 u. Taf. 59; ross 1963 S. 39; ross 1971, S. 122 u. Fig. 177.



80

Solothurn, Zentralbibliothek, Cod. (provisor) Nr. 217, fol. 292r.

Elsässisch, um 1440—60. Illustration in dem Alexander-Abschnitt der *Historienbibel* (Rezension IB). Für den mit der Rezension IA identischen Text siehe Kat. Nr. 77.

Rubrik: *Wie sich künig Alexander tet zwene griffen gegen himel führen.*

Die Illustration ist dem entsprechenden Text nicht getreu.

H. Vollmer, Ober- und Mitteldeutsche Historienbibeln, I, Berlin 1912, Nr. 30; L. Altermatt, Die von Staalsche Historienbibel der Zentralbibliothek Solothurn, in: Festschrift Karl Schwarber, Basel 1949, S. 35 ff.; ross 1963 S.; ross 1971 S. 116 u. Fig. 163; SETTIS-FRUGONI Fig. 84.



f) Sonstige

81

Aachen, Sammlung Peter Ludwig, Cod. 10, fol. 222v.

Historisierte Initiale aus einer in der ersten Hälfte des 13. Jhs. entstandenen Handschrift der *Historia Scholastica* von Petrus Comester.

Im Text von Petrus Comester ist die Luftfahrt Alexanders nicht erwähnt.

H. P. Kraus, *Twenty-five Manuscripts (Catalogue)*, Vaduz 1961, Nr. 12, S. 39 ff.; ROSS 1963 S. 37; SETTIS-FRUGONI S. 225 u. Fig. 75.



sind nämlich sehr frei aus dem Gedächtnis des Abschreibers erzählt, der eine Version dieser Episoden kannte, die in einiger Hinsicht mit der Pariser Handschrift des *Roman d'Alexandre* (Bibl. Nat., Cod. fr. 789) übereinstimmt.

Text:

Que Alexandre se fist avaler ens el fons de la mer, et après fist porter en l'air as grifons, et puis se mut en Babilone et la conquist. (Beginn der Einschaltung)

E puis se pensa il la nuit qu'il voloie veoir l'air. E quant vint a l'endemain si fist il sor la plainne dou sablon qui sor la marine de l'Ocean estoit, qui estoit larges de kascune partie plus de .iii. jornees (Lakune)

Donc fist faire .j. vaxel de fust biaux e larges tant qu'il poist dedens entrer. E puis fist prendre .ii. porcelés et lé fist lier as .ij. groses lances. E fist faire .ij. kaenes et lier bien li vaxel. E cil vaxiaus estoit reons com. j. ouf, si avoit .ij. pertuis par ont il mise les lances qui portoient li porcel. Puis entra dedens li rois Allexandres; e puis qu'il fu dedens il fist lier .ij. oysels grifons et sele kaene grosse a cel vaxel. Cill grifons estoient moult afamés, adonc lor monstra li rois Allexandres lé porcel as grifons, e quant li oysel lé virent, qui grans faim avoient, il s'esmurent tantost a voler por prendre cel porcel que voloient prendre. E toz fois voloient en aus a plus a plus qu'il cuydoient atendre les porcel. E ensi volerent il jusque ore de midi. E quant vint a ore de midi, que li soleil l'escanfoit moult durement, tant qu'il ne pooit plus durer, e qu'il estoient tant monté en sus que ses gens ne le purent veoir, et il ot moult veu e coneu de l'air, e qu'il ne veoit ne montagne ne planure ne nulle autre cosse fors li ciel et l'air, il comença de cliner li porcel ver li oisels grifons. Cant li oysel orent cel porcel pris il se devalerent aval o toz lé porcel as le vaxel, e vindrent toz droit entre les gens Allexandre. E quant li oyselz furent yloc keu que mangé avoient li porcel il se reposerent volenters. Adonc vindrent cil qui a li oysel donoient a manger si lé pristrent a lé retourner en lor gages qu'il soloient ester. E maintenant li rois ysit dou veysel qu'il moult en fu liés e si princes ausi qui menerent grans joie; e puis tantost furent mises les tables por manger a grans desduit. Adonx fist il metre en

82

Wien, Österreichische Nationalbibliothek, Cod. 2576, fol. 101r.

Illustration in dem Alexander-Abschnitt der im 14. Jh. in Venedig entstandenen Handschrift der *Histoire universelle*. Alexanders Meeres- und Himmelfahrt kommen im Vulgärtext der in der ersten Hälfte des 13. Jhs. aus verschiedenen Quellen kompilierten *Histoire universelle* nicht vor: die beiden Episoden stellen die für die Wiener Handschrift spezifische Interpolation dar. Die beiden Abenteuer



escrit toz cestes mervoilles et toz quant qu'il avoit fait ne conquesté.

Rubrik: *Que Alixandre se fist avalers el fons de la mer et apres se fist porter en lair as grifons et puis sen vint en Babiloine et la conquist.*

Alexander wird von zwei Greifen in die Luft emporgetragen, die mit Ketten an einem langen Spieß angebunden sind; dieser ist durch das ellipsenförmige Fuhrwerk durchstoßen, worüber aber der Text nichts sagt. Die Zuschauergruppe unten ist auch vom Text nicht gefordert, während die eiförmige Form des Fuhrwerkes von den eigenartigen Angaben des Textes bestimmt ist.

(Die Wiener *Histoire universelle* enthält sowohl in den Genesisminiaturen als auch in jenen Miniaturen, die profane Sagen und Geschichte der Antike illustrieren, eine Anzahl von spätantiken Darstellungsformen. In der Szene der Luftfahrt beispielsweise findet die Gruppe der vier aufwärts blickenden Figuren eine nahe Parallele in der Szene des Bundes Gottes mit Noah unter dem Regenbogen in der Wiener

Genesis, die sich im 14. Jh. in Venedig befunden haben dürfte.)

H. J. Hermann, Die westeuropäischen Handschriften und Inkunabeln der Gotik und Renaissance, 2. Teil (Beschreibendes Verz. d. illum. Hss. in Österr., N.F. VII/2), Leipzig 1936, S. 176 f. u. Taf. LVI/3; O. Pächt, A Giottoesque Episode in English Medieval Art, in: Journal of the Warburg and Courtauld Institutes, VI, 1943, S. 65 f. u. Taf. 16/c; BERTELLI S.246; D.J.A. Ross, The history of Macedon in the Histoire ancienne jusqu' à César, in: Classica et Medievalia, XXIV, 1963, S. 226 ff.; ross 1963 S.20; K. Koshi, Die Wiener „Histoire universelle“ (Cod. 2576) unter Berücksichtigung der sogenannten Cottogenesis-Rezension, Diss. Wien 1971, S. 111 ff., u. 116 ff.; K. Koshi, Die Genesisminiaturen in der Wiener „Histoire universelle“ (Cod. 2576), (Wiener Kunstgeschichtliche Forschungen I), Wien 1973, S. 29 f. u. Abb. 42; SETTIS-FRUGONI S. 227 ff. u. Fig. 76.

83

Wolfenbüttel, Herzog August Bibliothek, Cod. Guel. 1. 5. 2. Aug. Fol., fol. 129v. col. 1.

Illustration in dem Alexander-Abschnitt (*Alexander* von Ulrich von Eschenbach) der deut-

schen Sammelhandschrift (*Christherrechronik* etc.) des späten 14. Jhs.

Text:

*sô hært waz Alexander tet.
Pôrus zwên grifen het,
die er von jugent het erzogen.
der het ein meister sô geplogen
und het sie alsô gewent,
daz man sie mit âse zent,
daz sie vlugen war man wolde.
Alexander niht ensolde
der unmâze enbern,
ern wolt ûz der mâze gern.
von seltsænen sachen
hie� er ein gesæze machen,
starc keten dar an smiden
und die an die grifen widen.
in daz gestüele sazter sich,
als die rede vernomen ich
von der crônike lêre hân,
ouch hiez der muotwillic man
ûf daz gestüelde stecken
zwei âs gar hôle recken:
dar nâch die grifen ûf vlugen
und in gegen den lûften zugen,
das er an daz hæste kam.*



*niht mê wunder er vernam
wenn daz daz ertrich ummegienc
wazzer und daz gar bevienc,
und daz der erde breite
ûf daz wazzer geleite
swebt als ein cleiner huot.*

Obwohl im Text zwei Lanzen mit der Lockspeise erwähnt sind, ist in der Illustration nur eine dargestellt.

Heinemann, Katalog der Handschriften der Herzog August Bibliothek zu Wolfenbüttel, Wolfenbüttel 1890—1903, Bd. II, Nr. 1589, S. 26; H. Jerchel, Die bayerische Buchmalerei des 14. Jahrhunderts, in: Münchner Jahrbuch der bildenden Kunst, N.F., 10, 1933, S. 100 f.; ross S. 40; D.J.A. Ross, Two new manuscripts of the Alexander of Ulrich von Etzenbach, in: Zeitschrift für deutsche Altertum, XCVI, 1967, S. 239 ff.; ross 1971 S. 70 f. u. Fig. 76.

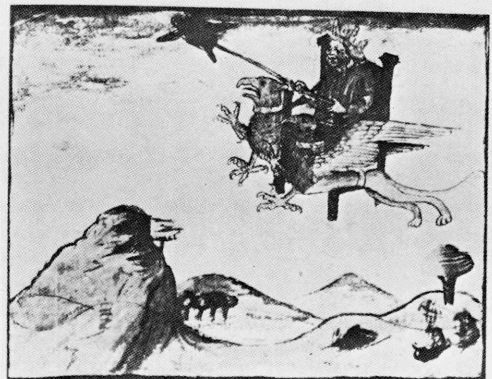
84

München, Bayerische Staatsbibliothek, Cod. c.g.m. 581, fol. 133v.

Illustration von Hector Mülich (Augsburger Kaufmann) in der 1455 datierten Handschrift der von Leo's *Nativitas et Victoria Alexandri Magni* abhängigen *Histori von dem grossen Alexander* (oder *Alexanderbuch*) von Johann Hartlieb.

Text:

Da gedacht ich je, wie ich den Himmel berühren möcht, und ließ mir bereiten ein starken Sessel, der whol mit Eisen beschlagen war, daran hieß ich machen starke Balken, und band daran gezähmte Greifen, und hätt davor eine lange Stangen, daran war den Greifen ihr Essen gemacht; die Stangen mocht



ich zu den Greifen rücken oder von ihnen.
Ich ließ die Greifen ihr Aas kosten, darnach
recktet ich die Stange über sie, aber die
Greifen vermeinten die Speise zu erlangen und
schwangen ihr Gefieder; mit dem erhuben sie
mich und den Sessel von der Erde.

Rubrik: wie alexander in die lüft vār mit den
greÿffen.

ROSS 1963, S. 49; ROSS 1971 S. 140 u. Fig. 208.

85

Nürnberg, Stadtbibliothek, Cod. Cent. V,
App. 34^a, fol. 144v.

Nordbayerische Sammelhandschrift aus der
zweiten Hälfte des 15. Jhs. Eine der vier
Alexander-Illustrationen im *Bibel-Bilderbuch*,
das die Handschrift enthält.

Text:

...wunders am hymel und in den wolken
were Und ließ jm ein stül machen und ließ
czwen kolben von fleyßch an czwu stangen
pinden an den stühl und zwen greÿffen ließ
er auch neben an stül pinden daz die selbigen
greÿffen den kolben fleysch noch solten fligen
daz sie jn dester hocher mochten furen uncz
an die wolcken do furttē die greÿffen den
kung daz der gotliche wil nit was er hocher
solt kummen do kom ein stym die sprach zu



jm awß ein grimiglichen zornn alexander wo
wildu hin wildu wider got streben daz wirt dir
leyt jn dem hymel kumpt nymant dan der es
ver dint hat mit gutten wercken do der kung
die stym vernam do sprach der kung wo sol
ich hin faren Die stym sprach auf das ertrich
der kung sprach ich sich nictes dan ein hwt
sweben in dem wasßer Do sprach die stym das
ist das ganz ertrich do fare zu das tet er.

Sowohl der Alexander-Text als auch seine
Illustrationen in der Nürnberger Handschrift
sind aus einer illustrierten Handschrift von
Jansen Enikel's *Weltchronik* entlehnt.

K. Schneider und H. Zirnbauer, Die Handschriften
der Stadtbibliothek Nürnberg, Wiesbaden 1965, Vol.
I, S. 440 ff. u. Taf. 17; ross 1971 S. 124 f. u. Fig. 428.

IV Übrige westliche Bild- zeugnisse

86

London, Victoria and Albert Museum (Depot
von J.C.E. Harding Rolls).

Rheinisch (Umkreis des Godefroid de Claire),
Mitte des 12. Jhs. Email.

Die einzigartige Darstellung der Szene im
Profil: Alexander sitzt in einem von links
kommenden Wagen, und die beiden Greifen
streben im Profil hintereinander nach rechts
empor. Die Luftfahrt Alexanders ist Simson
mit dem Löwen gegenübergestellt.



J. B. Waring and F. Bedford, *Art treasures of the United Kingdom*, London 1858, Taf. 6, Nr. 5; PANZER S. 10 u. Abb. 12; LOOMIS S. 178 u. Taf. II/L; STAMMER Sp. 341; W. H. Forsyth, *Around Godefroid de Claire*, in: *Bull. of the Metropolitan Museum of Art*, XXV, 1966, Fig. 18; SETTIS-FRUGONI S. 257 u. Fig. 83.

87

Soest, St. Patrokus-Kirche.

Gesticktes Kissen, das ursprünglich in der Reliquienleiste des hl. Patrokus dem Kopf des Heiligen als Unterlage diente. Deutsch, 12. Jh. Inschrift: *ALEXANDER REX*.

Alexander als Symbol der Superbia ist dem Lamm Gottes (auf der anderen Seite) gegenübergestellt. In den Händen hält der König an sehr kurzen Stängelchen Lockspeise für die Vögel, die hier nicht wie überall sonst als Greifen gebildet sind.

SCHNÜTGEN, XII, S. 159 u. XV, 1902, S. 177 ff. u. Fig. 1—2; Clemen, in: *Zeitschrift für bildende Kunst*, 1903, S. 39; PANZER S. 10; LOOMIS S. 140, 183, u. Taf. I/A; STAMMLER Sp. 337; M. Schutte, S. 27 u. Abb. 39; SETTIS-FRUGONI S. 157 f. u. Fig. 36.



88

Rom, Palazzo Doria

Wandteppich, ca. 1450—60 in Tournai für Philipp den Guten von Burgund gewirkt.

Die literarische Grundlage bildet der Alexander-Roman des Jean Wauquelin von 1448. Alexander sitzt in einem verzierten Metallkäfig, in jeder Hand hält er eine Stange mit den Ködern für die vier Greifen.

A. Warburg, *Hamb. Fremdenb.*, Beilage zu Nr. 252 vom 2. März 1913; B. Kurth, *Jb. Allerh. Kaiserh.*, 34, 1918, Taf. VII u. VIII; LOOMIS S. 183 u. Taf. II/o; HERZFELD S. 128; Got. Bildteppiche aus Frankreich u. Flandern, München 1923, Taf. 30—32; STAMMLER Sp. 342; A. Warburg, *Luftschiff und Tauchboot in der mittelalterlichen Vorstellungswelt*, wiedergedruckt in: *Gesammelte Schriften*, I, 1932, Italienische Ausgabe 1966 (in: *La rinascita del paganesimo antico*, Florenz, S. 275 ff.); G. T. Van Ysselsteyn, *Tapesery—The most expensive industry of the XVth and XVIth centuries*, Den Haag—Brüssel 1969, S. 53 S. Tf. 28; SETTIS-FRUGONI S. 239.



89

München, Bayerisches Nationalmuseum.

Decke der Weberzunftstube aus Augsburg, die 1457 von Peter Kaltenhaf gemalt wurde. Unterschrift: *Alexander fuer in die höchen, Tät zwue span breit die ganz erd sechen.*

Alexander sitzt in einer Art Stuhl, vor den die Greifen gespannt sind.

PANZER S. 9; STAMMLER Sp. 338; Festschrift zum hundertjährigen Bestand des Bayerischen Nationalmuseums, München 1955, S. 45.

90

Zierbildchen in dem auf Plutarch's *Vitae Parallelae* basierenden *Triomphe des neuf preux* (Ausgabe von Michel Le Noir, Paris 1507).

CARY Fig. 4; B.A. Henisch S. 25 u. Fig. 1; SETTIS-FRUGONI S. 225 (Anm. 64).



91

London, British Museum, Print Room.

Einzelblattholzschnitt von Hans L. Schäuffelein (ca. 1480/90—1539/40), 210 × 143mm. (Das Blatt des British Museums ist das einzige bekannte Exemplar). Anfang des 16. Jhs.

DODGSON S. 396 f. u. Taf. II; LOOMIS S. 183; M. Geisberg, Der deutsche Einzelblattholzschnitt in der ersten Hälfte des 16. Jahrhunderts, München 1930, Nr. 1063; STAMMLER Abb. 7 u. Sp. 341; C. Dodgson, Catalogue of Early German and Flemish Woodcuts preserved in the Department of Prints and Drawings in the British Museum, II, 1971, No. 117.



V. Bildzeugnisse, die in zeitgenössischer Literatur erwähnt werden, aber nicht auf uns gekommen sind.

92

Der Chronist Ayméric de Peyrac (gest. 1406) erwähnt einen Mosaikfußboden von 1063 in Moissac, in dem König Chlodwig zwischen zwei Greifen dargestellt sein soll: möglicherweise handelt es sich hier in Wirklichkeit um Alexanders Luftfahrt.

Paris, Bibliothèque Nationale, Cod. lat. 4941 A, fol. 103v—104r:

Cum ascenderet (Clodoveus) de Bur degala Tholosam talis visio sibi affuit nocturnal, scilicet, quod duo griffones in rostris lapvides habentes, eos in quadam valle asportavit et ibi quandam ecclesiam debito hedifico iniciabat. ...Unde in pavimento de lapillis variis duobus griffonibus materialiter artificio compactis prope altare dicti monasteri, major huius proceditur rei geste figura.

E.A. Lagrèze-Fossat, Etudes historiques sur Moissac, 3, Paris 1874, S. 497; J. Monméja, Mosaïques du Moyen Âge et carrelages émaillés de l'abbaye de Moissac, in: Bull. Archéol., 1894, S. 196, 268 ff.; STAMMLER Sp. 338; M. Durliat, L'Église abbatiale de Moissac des origines à la fin du XIe siècle, in: Cahiers Archéologiques, XV (1965), S. 155 ff.; M. Vidal, J. Mavry u. J. Porcher, Quercy Roman, La Pierre-qui-vire (Yonne) 1969, S. 107; SETTIS-FRUGONI S. 268 ff.

93

In der Geschenkliste des Papstes Bonifaz VIII. im Inventar des Domes von Anagni (vor 1303) ist eine Darmatik erwähnt, auf der die Luftfahrt Alexanders gestickt war:

Item j dalmatica de samito viridi cum paraturis in fimbriis historia Alexandri elevati per grifos in aerem.

B. di Montault, in: Annales archéologiques, 18, 1858, S. 26; LOOMIS S. 140; STAMMLER Sp. 337; L. Mortari, Il tesoro della cattedrale di Anagni, Rom 1963, S. 14; SETTIS-FRUGONI S. 154.

94

Ein italienisches Gedicht des 14. Jhs., *La Intelligenza*, beschreibt ein Zimmer mit Wandbildern, von denen eines Alexanders

Greifenfahrt darstellt:

*Evvi 'ntagliato Alessandro signore
come si mosse ad acqvisitar lo mondo...
E come in aria portarlo i griffoni, e come
vide tutte le regioni...*

J.v. Schlosser, Quellenbuch zur Kunstgeschichte des abendländischen Mittelalters, Wien 1896, S. 347; LOOMIS S. 140; V. Mistruzzi, L'Intelligenza, Bologna 1928, Stanza 216; STAMMLER Sp. 337; SETTIS-FRUGONI S. 160.

VI. Bildzeugnisse, die in der Forschung fälschlich als dem Thema der Luftfahrt Alexanders zugehörig interpretiert wurden, oder solche, deren Zusammenhang mit der Himmelfahrt nicht mit der notwendigen Stringenz bewiesen werden kann.

95

Berlin, Staatliche Museen.

Koptischer Stoff, 6.—7. Jh.

W. F. Volbach, Spätantike und koptische Stoffe, Berlin 1926, S. 16 f. u. Taf. 46; SETTIS-FRUGONI S. 152 u. Fig. 33.



96

Brüssel, Musée du Cinquantenaire.

Koptischer Stoff aus Münsterbilsen, 7. Jh.

I. Errera, Catalogue d'Étoffes anciennes et modernes (des) Musée Royaux des Arts Decoratifs de Bruxelles, Brüssel 1907², S. 13 u. Taf. I^{KK}; G. Migeon, Les Arts du Tissue, Paris 1909, S. 21; O. v. Falke, Kunstgeschichte der Seidenweberei, Berlin 1913, S. 57 u. Fig. 74;



LOOMIS S. 140; BRÉHIER S. 99; E. Riefstahl, in: Coptic Studies in Memory of E. Crum, Boston 1950; RICE S. 216; BERTELLI S. 245; SETTIS-FRUGONI S. 150 u. Fig. 27b.

97

Rom, Museo dell'Alto Medioevo (ehem. Castel S. Angelo).

Reliefplatte, aus dem mittelalterlichen Rom stammend. 9.—10. Jh.

J. Sauer, Symbolik des Kirchengebäudes und seine Ausstattung in der Auffassung des Mittelalters, 2. Auflage, Freiburg i. Br. 1924, S. 439; POPPEN S. 169; STAMMLER Sp. 337; L'ORANGE S. 120 f. u. Fig. 88; BERTELLI S. 245; SETTIS-FRUGONI S. 160 f. u. Fig. 38.



98

Palermo, Cappella Palatina.

Gemalte Decke des 12. Jhs.

A. Pavlovskij, Décoration des plafonds de la Chapelle Palatine, in: Byzantinische Zeitschrift, 11, 1893, S. 399 u. Fig. auf S. 395; O. Wulff u. W. J. Volbach, Spätantike und koptische Stoffe, Berlin 1926, S. 16 f.; U. Monnerat de Villard, Le pitture musulmane al soffitto della Capella Palatine, Rom 1950, S. 71 (Anm. 251); BERTELLI S. 246; SETTIS-FRUGONI S. 180 (Anm. 97) u. Fig. 53.



99

Agoune (Schweiz), Église de Saint-Maurice.
Email auf der Goldkanne.

M. Rosenberg, Geschichte der Goldschmiedekunst; Zellenschmelz, III, 1921, Fig. 46; A. Alföldi, Die Goldkanne von Saint Maurice d'Agoune, in: Zeitschrift für Schweizerische Archäologie und Kunstgeschichte, X, 1948, S. 1 ff.; RICE S. 216; SETTIS-FRUGONI S. 187 (Anm. 115).

100

Genf, Musée d'art et d'histoire.
Kapitell des 11. Jhs. aus der Kathedrale St. Peter in Genf.

W. Déonna, Chapiteaux de la cathédrale Saint Pierre à Genève, in: Genava, XXV, 1947, S. 57 u. Taf. 8; SETTIS-FRUGONI S. 283.



101

Petershausen bei Konstanz, Klosterkirche, Portal. (Eine Zeichnung des Portals ist in dem Buch von J. Bergmann, Sammlung der vorzüglichsten Merkwürdigkeiten des Großherzogtums Baden, Konstanz 1825, erhalten und Zeichnungen der Reliefs sind in N. Hug,

Abbildungen alter Kunstwerk, Konstanz 1832, veröffentlicht).

Sandsteinrelief des 12. Jhs. (zwischen 1173 und 1180).

O. Homburger, Materialien zur Baugeschichte der zweiten Kirche zu Peterhausen bei Konstanz, in: Oberrheinische Kunst, II, 1926/27, S. 153 ff. u. Taf. 79; HAMANN S. 52 ff. u. Abb. 2—3; PEISTER S. 333; HOLL Sp. 96; SETTIS-FRUGONI S. 284 f. u. Fig. 94.



102

Zürich, Großmünster.
Pfeilerkapitell.

Abgekürzte Darstellung einer von zwei Greifen getragenen Figur.

STAMMLER Sp. 338.

103

Fritzlar, Dom.
Kapitell aus dem Anfang des 13. Jhs.

Ein nackter Mann sitzt auf den zusammengewachsenen Schweifen von zwei hochstrebenden Greifen.

STAMMLER Sp. 339.

104

Worms, St. Paul, Chor.
Kapitell.

STAMMLER Sp. 340.

105

Köln, Dom.
Miserikordie um 1340.
Zwei geflügelte Wesen packen einen Mann an

der Schulter; dieser sitzt ruhig, mit übergeschlagenen Beinen, und legt seine Hände über den Knien zusammen (die Füße sind zerstört).

B. v. Tieschowitz, *Das Chorgestühl des kölner Domes*, Berlin 1930, Taf. 92 u. S. 27; STAMMLER Sp. 337; SETTIS-FRUGONI S. 285.



106

Ják (Ungarn), Kirche.

Relief des nördlichen Nebenchores, um 1280.

HAMANN S. 58 u. Abb. 9; G. de Francovich, *La corrente comasca nella scultura romanica europea*, in: *Riv. dell'Ist. di Archeol.*, VI, 1937/38, S. 115 u. Fig. 74; SETTIS-FRUGONI, S. 285.



107

Leningrad (Ermitage) und Kopenhagen.

Romanische Brettsteine.

A. Goldschmidt, *Die Elfenbeinskulpturen*, 3, Berlin (1914) Abb. 195 u. 246; STAMMLER Sp. 341.

108

Poitiers, Église de Ste. Radegonde

Kapitell.

A. Prandi, *Il Salento provincia dell'arte bizantina*, in:

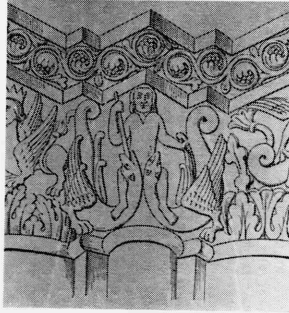
Atti del Convegno internazionale sul tema: l'Oriente cristiano nella Storia della Civiltà, Rom 1964, S. 682 f.; SETTIS-FRUGONI S. 282.

109

Amboise, Saint-Denis.

Kapitell.

CAHIER S. 214 f.



110

Caen.

Kapitell.

D. J. A. Ross, *Alexander and the Faithless Lady: a Submarine Adventure* (an inaugural lecture delivered at Birkbeck College), London 7th Nov. 1967, S. 5; SETTIS-FRUGONI S. 282.

111

Rouen, Dom, Kapelle S. Etienne.

Kapitell.

Adeline, *Les Sculptures Grotesques*, S. 10, III; MEISSNER S. 185; F. X. Kraus, *Christliche Kunst*, II, 1, Freiburg i. Br. 1897, S. 403; PANZER S. 9; SETTIS-FRUGONI S. 283.

112

Urcel bei Laon, Kirche.

CAHIER S. 173 u. Fig. B; PANZER S. 9; SETTIS-FRUGONI S. 282.



113

Le Mans, Kathedrale.

Kapitell.

CAHIER S. 171; PANZER S. 9; LOOMIS S. 178.



114

Conques, Sainte Foy, nördliches Querschiff.

Kapitell, Ende des 11. Jhs. oder Anfang des 12. Jhs.

SETTIS-FRUGONI S. 285.

115

Durrow, Friedhof.

Kreuz des 10. Jhs.

SETTIS-FRUGONI S. 285.

116

Lund (Schweden), Kathedrale, nördliches Seitenschiff.

Unvollendetes Kapitell aus der ersten Hälfte des 12. Jhs.

L'ORANGE S. 72 u. Fig. 48; SETTIS-FRUGONI S. 285 u. Fig. 95.



117

Lund, Kloster der Allerheiligcn.

Kapitell.

L'ORANGE S. 72 u. Fig. 49; SETTIS-FRUGONI S. 285.

118

Fardheim (Insel Gotland, Schweden), Kirche.

Portalrelief aus der zweiten Hälfte des 12. Jhs.

H. Ronge, Konung Alexander, Uppsala 1957, Taf. I (Fig. 96); SETTIS-FRUGONI S. 285.

